ダイジェスト版

子どもの生活と学びに関する親子調査 2023

「子どもの生活と学び」研究プロジェクトについて … p.2
調査概要 … p.3
基本属性2023 … p.4

Ⅰ 子どもの生活の変化 … p.5～6
1. 生活時間の変化
2. さまざまな経験

Ⅱ 学校・学習の変化 … p.7～14
1. 学校での生活
2. 学習意欲
3. 学習方法
4. 学習時間
5. 学びでのデジタル機器の利用
6. 得意・苦手（子どもの自己評価）

Ⅲ 人との関係 … p.15～16
1. 保護者のかかわり
2. 友だち関係

Ⅳ さまざまな意識の変化 … p.17～21
1. 自己認識
2. 将来に対する意識
3. 職業・仕事に対する意識
4. 社会に対する意識
5. 受験・進学に対する意識

Ⅴ 満足度・幸福感 … p.22～23
1. さまざまな満足度
2. 親子の幸福感

調査企画・分析メンバー … p.24

ISS 東京大学社会科学研究所　ベネッセ教育総合研究所

「子どもの生活と学び」研究プロジェクトについて

東京大学社会科学研究所とベネッセ教育総合研究所は、2014年1月に、「子どもの生活と学び」の実態を明らかにする共同研究プロジェクトを立ち上げました。
本ダイジェスト版では、この研究プロジェクトの一環として行った調査結果を載せています。

研究プロジェクトの特徴

01 小学1年生から高校3年生の「現在」と「時代変化」をとらえることができる

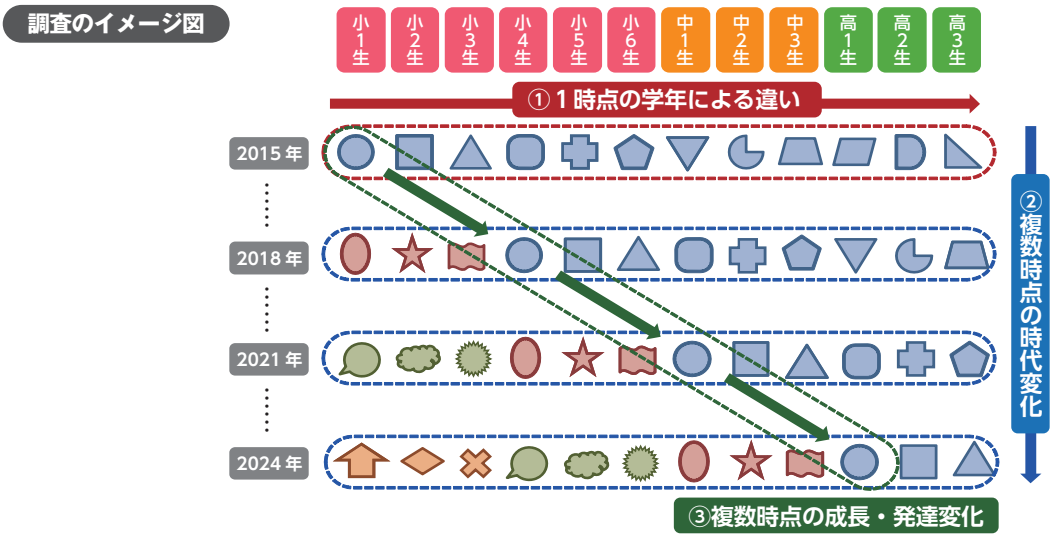
本研究プロジェクトでは、小学1年生から高校3年生の子どもとその保護者に対して、毎年継続して調査を実施しています。これにより、12学年にわたる子どもの生活や学び、保護者の子育ての実態などの「現在」の様子（1時点の学年による違い）を明らかにできます（図中①）。また、経年比較により、子どもと保護者の「複数時点の時代変化」をみることができます（図中②）。

02 親子の「成長・発達」のプロセスをとらえることができる（親子パネルデータ分析）

また、本研究プロジェクトでは、同じ子どもとその保護者を継続して調査しています。これにより、子どもが毎年どのように成長・発達していくのか、また、それによって保護者のかかわりや意識はどのように変化するのかといった、同じ親子の「複数時点の成長・発達変化」の様子や因果関係を明らかにすることができます（図中③）。

03 子どもの生活と学びにかかわる意識や実態を、幅広く詳細にとらえることができる

子どもを対象にした調査では、生活、学習、人間関係、価値観、自立の程度などを幅広くたずねています。また、保護者を対象にした調査では、子どもへのかかわりや子育て・教育の意識などをたずねています。この2つの調査から、子どもと保護者の日々の生活や学習の様子を浮かび上がらせるとともに、子どもと保護者の課題に迫ります。



※研究プロジェクトの詳細は、最後のページで紹介しているWebサイトよりご覧ください。

◇データ扱い上の注記

• 図表で使用している百分率（%）は、小数第2位を四捨五入して算出している。四捨五入の結果、数値の和が100.0にならない場合がある。

調査概要

調査テーマ

子どもの生活と学習に関する意識と実態（子ども調査）
保護者の子育て・教育に関する意識と実態（保護者調査）
……同一の親子を対象に 2015 年から継続して追跡する縦断調査

調査時期

2023 年 7 ～ 9 月

調査方法

郵送にて調査を依頼、Web にて回答
※ 2015 ～ 2023 年では、調査依頼は各回とも郵送、回収は 2015 年郵送・Web 併用、2016 ～ 2020 年郵送のみ、2021 年郵送・Web 併用、2022 ～ 2023 年 Web による回答のみ。

調査対象

全国の小学１年生から高校３年生の子どもとその保護者
※小学１～３年生は保護者のみが回答。

発送数・回収数・回収率

	全体			小1～3生			小4～6生			中学生			高校生		
	発送数	回収数	回収率(%)	発送数	回収数	回収率(%)	発送数	回収数	回収率(%)	発送数	回収数	回収率(%)	発送数	回収数	回収率(%)
2015年	21,569	16,574	76.8	5,504	4,690	85.2	5,080	3,950	77.8	5,379	4,051	75.3	5,606	3,883	69.3
2016年	21,485	15,849	73.8	5,617	4,915	87.5	5,234	3,797	72.5	5,225	3,706	70.9	5,409	3,431	63.4
2017年	19,136	15,307	80.0	5,700	5,167	90.6	4,662	3,643	78.1	4,312	3,311	76.8	4,462	3,186	71.4
2018年	18,217	14,424	79.2	5,408	4,928	91.1	4,634	3,616	78.0	3,977	2,967	74.6	4,198	2,913	69.4
2019年	20,056	15,311	76.3	5,879	5,175	88.0	5,251	4,071	77.5	4,497	3,168	70.4	4,429	2,897	65.4
2020年	20,413	15,656	76.7	5,921	5,127	86.6	5,639	4,407	78.2	4,595	3,323	72.3	4,258	2,799	65.7
2021年	20,471	15,596	76.2	5,829	5,066	86.9	5,704	4,430	77.7	4,812	3,432	71.3	4,126	2,668	64.7
2022年	20,951	13,398	63.9	5,844	4,716	80.7	5,737	3,664	63.9	5,058	2,922	57.8	4,312	2,096	48.6
2023年	21,525	13,201	61.3	5,743	4,583	79.8	5,869	3,489	59.4	5,462	3,070	56.2	4,451	2,059	46.3

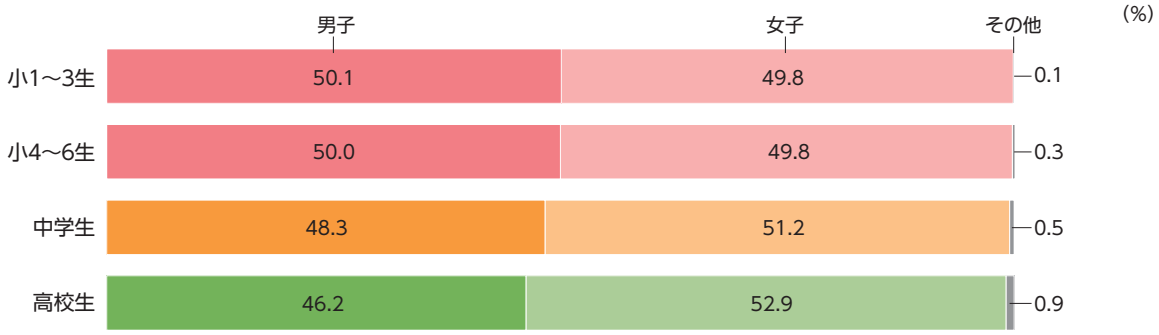
※本冊子では、各調査年の有効回答を分析対象としている。①親もしくは子どもの片方回答（小４～高３生）、②学年の回答が親と子で不一致、③調査発送時の学年と回答学年が不一致、④「在学していない」と回答したケースは、有効回答から除外している。

※調査方法の変更に伴い、調査年ごとの違いを同じ条件で比較するため、設問ごとに「無回答・不明」を除いた実回答数を分母として数値の算出を行った。このため、2021 年度調査までに発表した数値と異なることがある。

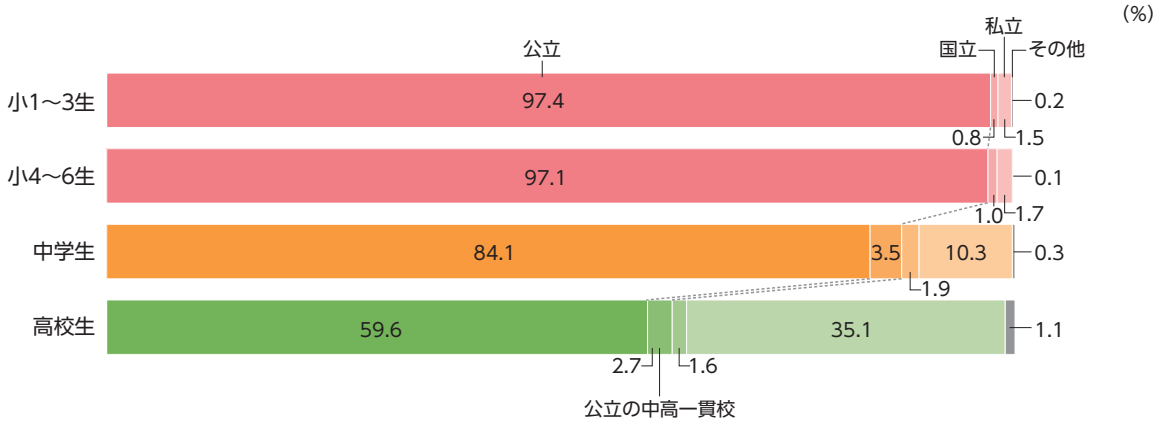
※本冊子の解説文での「小中学生」は小４～６生と中学生を指し、「小中高校生」は小４～６生、中学生、高校生を指している。

基本属性 2023

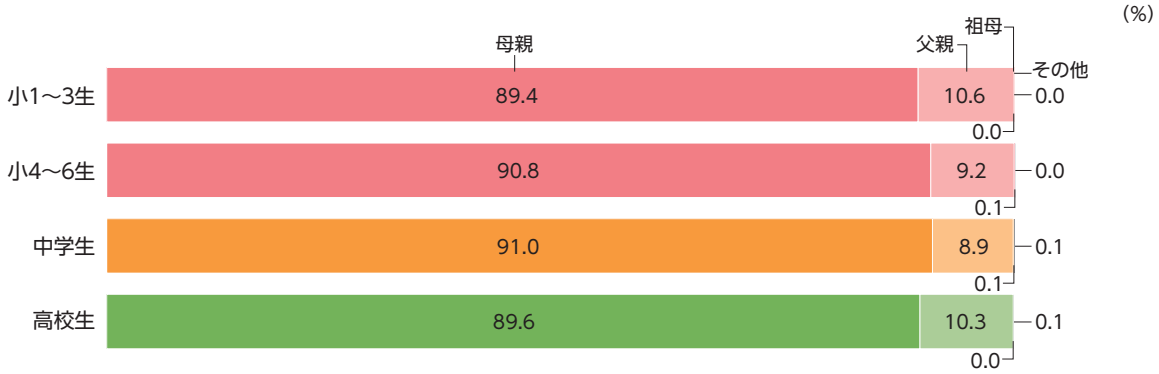
■子どもの性別（学校段階別）



■子どもが通っている学校の種類（学校段階別）

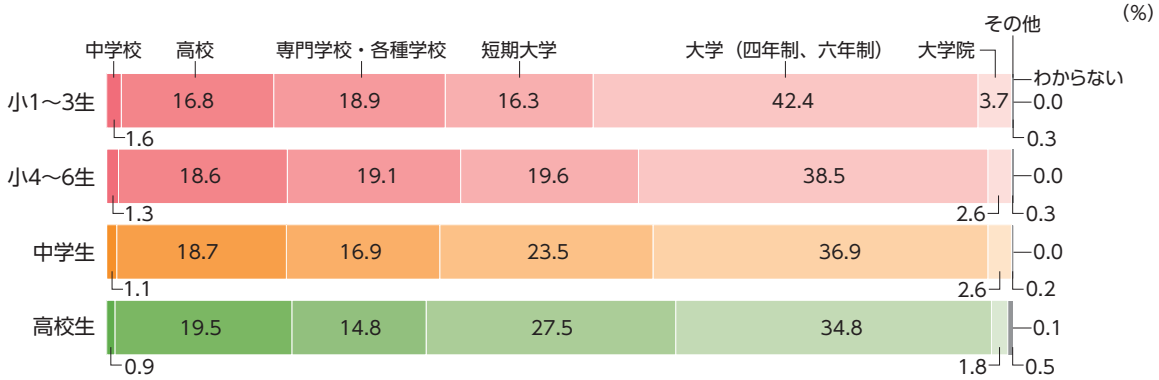


■保護者と子どもとの続柄（学校段階別）



※「祖父」は０％のため、表示していない。

■母親の最終学歴（学校段階別）



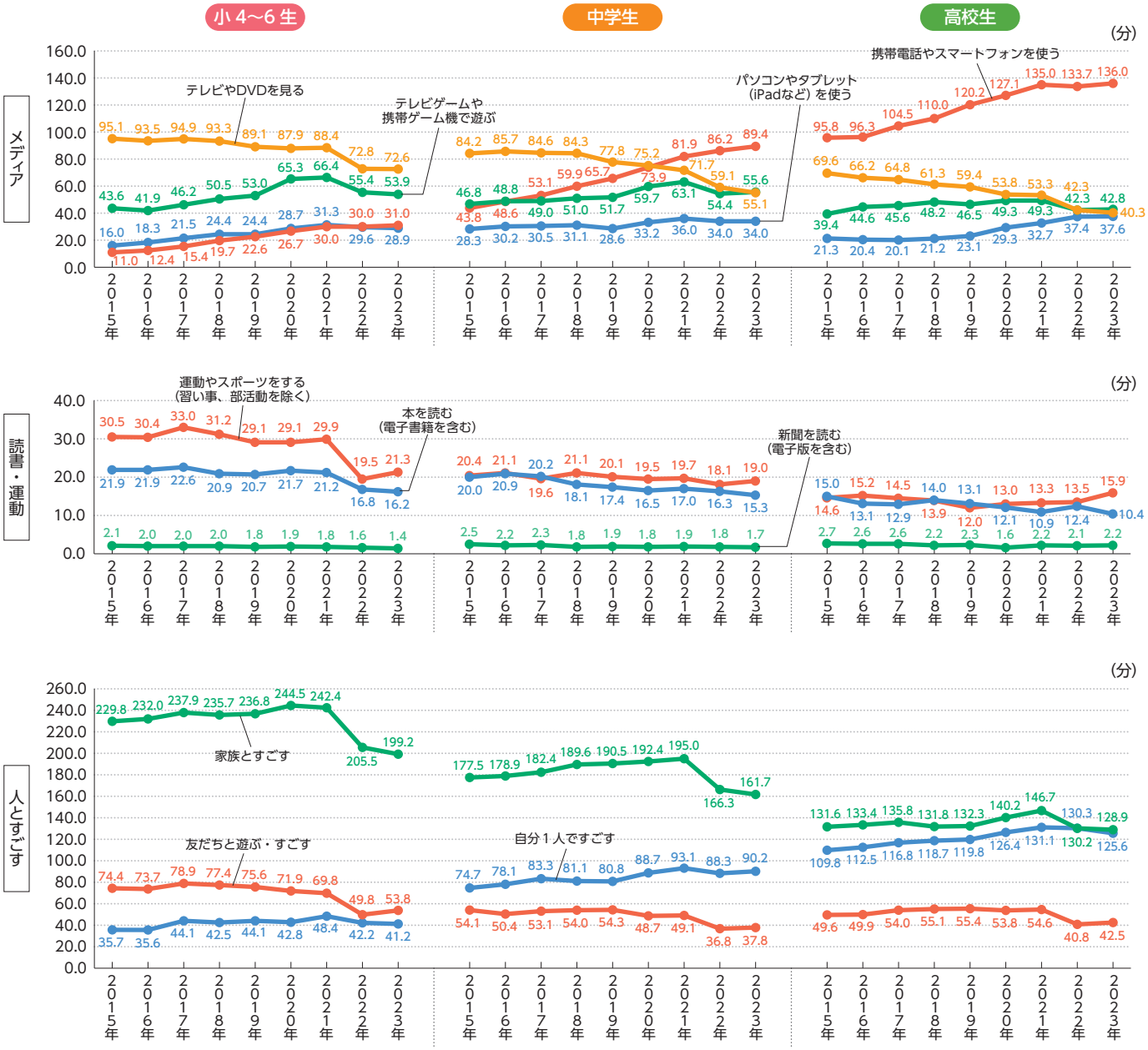
1 生活時間の変化

携帯電話やスマートフォンの１日の平均利用時間は、小４～６生 30 分、中学生１時間半、高校生２時間以上

2015 年からの推移をみると、テレビや DVD を見る時間以外は、子どものメディアの利用時間が増加傾向にある。とくに携帯電話やスマートフォンの利用時間は小４～６生 20 分、中学生 46 分、高校生 40 分増加した。一方、本を読む時間はこの８年間で、どの学校段階も５分程度減少した。また、友だちと遊ぶ時間は 2022 年までは減少傾向にあるが、2022 年からは小４～６生は若干増加し、中高生は横ばいだった。2021 年からどの学校段階でも家族とすごす時間が減り、かつ学校段階が低いほど減り幅が大きい。コロナ禍やメディア利用の普及などが子どもの生活時間に変化をもたらしたのかもしれない。

Q あなたはふだん（学校がある日）、次のことを、１日にどれくらいの時間やっていますか。学校の中でやる時間は除いてください。日によって違うときは、平均してだいたいの時間を教えてください。

図１－１－１　生活時間　　子ども回答



注　平均時間は、「しない」を「０分」、「４時間」を「240分」、「４時間以上」を「300分」などと置き換えて算出。

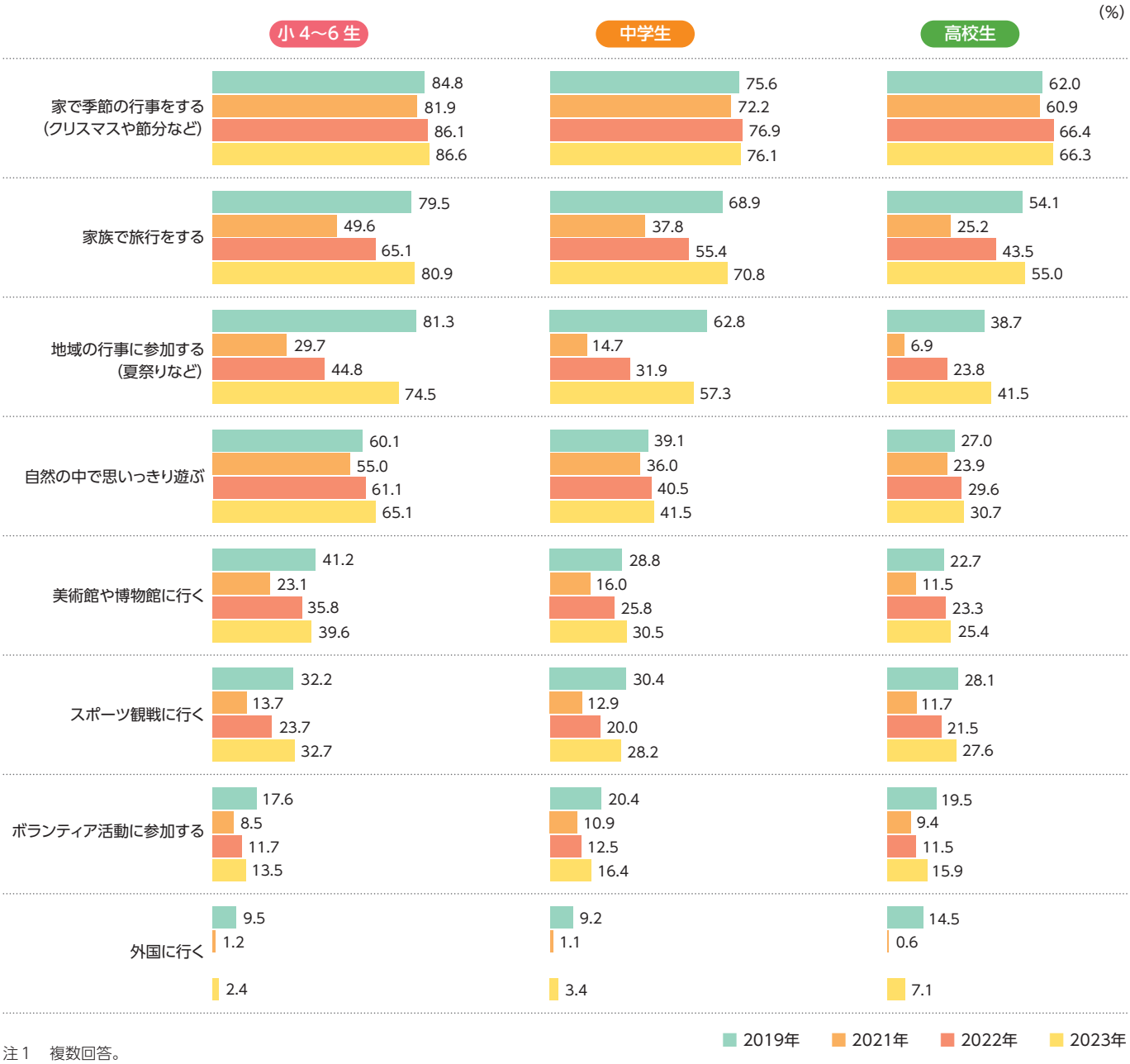
2 さまざまな経験

行事や活動への参加は、ほぼコロナ禍前の水準に回復

子どもにこの１年間に経験したことをたずねた。2019 年から 2021 年にかけては、コロナ禍による行動制限で、地域の行事、旅行、自然の中で遊ぶこと、博物館に行くこと、スポーツ観戦などの活動が軒並み減少した。2023 年では、多くの行事や活動はコロナ禍前の 2019 年と同じ水準に戻ったが、「外国に行く」ことは回復していない。これらに対して、人との接触が比較的少ないと思われる「家で季節の行事をする」や「自然の中で思いっきり遊ぶ」などは、2021 年でそれほど大きな減少はしていない。

Q この１年くらいの間に、あなたは次のようなことを経験しましたか。
経験したことがあるものをすべて選んでください。

図１－２－１　さまざまな経験　　子ども回答



注１　複数回答。
注２　2020年調査では、経験についてたずねていない。
注３　2022年調査では、「外国に行く」はたずねていない。
注４　2023年の小４～６生の数値の降順に示す。

1 学校での生活

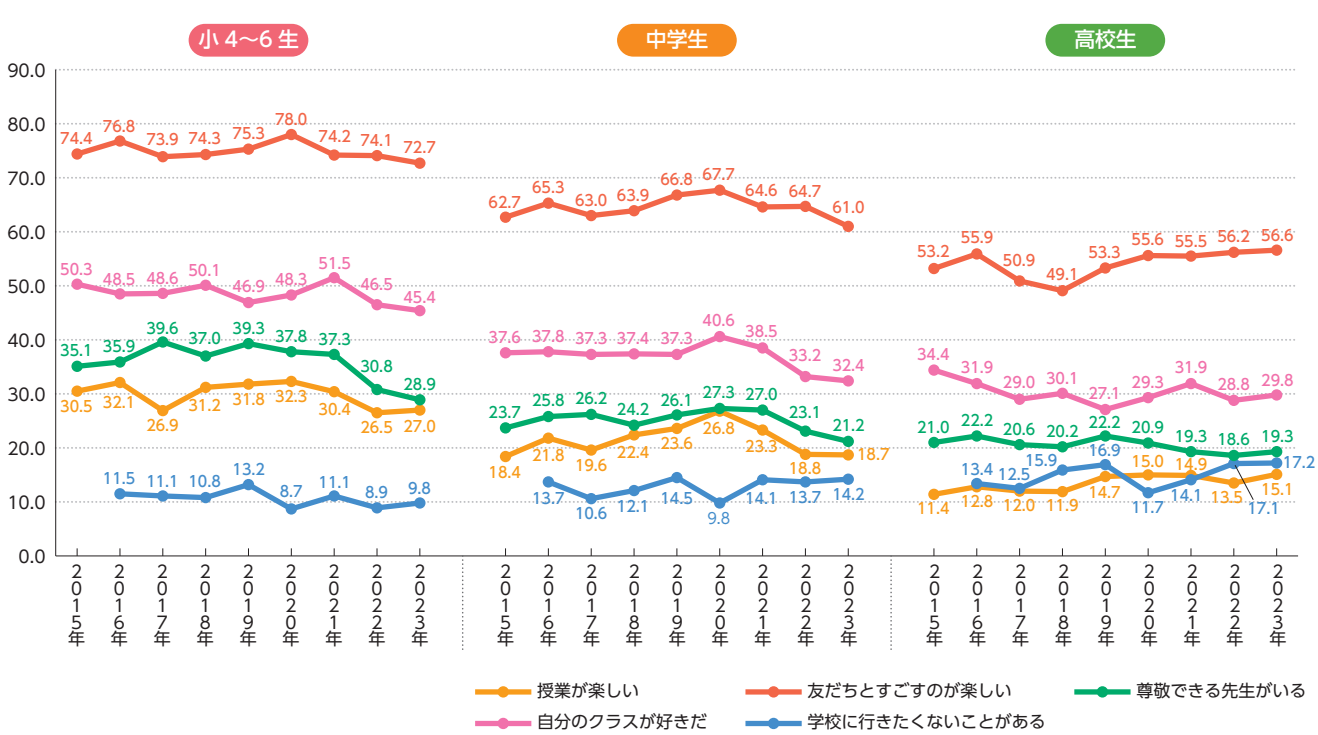
２割弱の高校生は「学校に行きたくないことがある」と回答

学校での生活についてたずねたところ、「友だちとすごすのが楽しい」に「とてもあてはまる」と回答した小中学生は、2020年から2023年にかけて減少傾向にあり、2023年では小４～６生は７割、中学生は６割、高校生は５割強だった。また、「自分のクラスが好きだ」と感じる子どもは2015年と比べてどの学校段階でも減少し、小４～６生４割、中高生３割前後だった。一方で、「学校に行きたくないことがある」と回答した中高生の割合は2020年から増加傾向にある。とくに性別にみると、中高生では女子の「学校に行きたくないことがある」と回答する割合が高い。また高校生の男子では、2021年から2023年にかけて増加している。

Q 学校生活について、次のようなことはどれくらいあてはまりますか。

図２－１－１　学校での生活

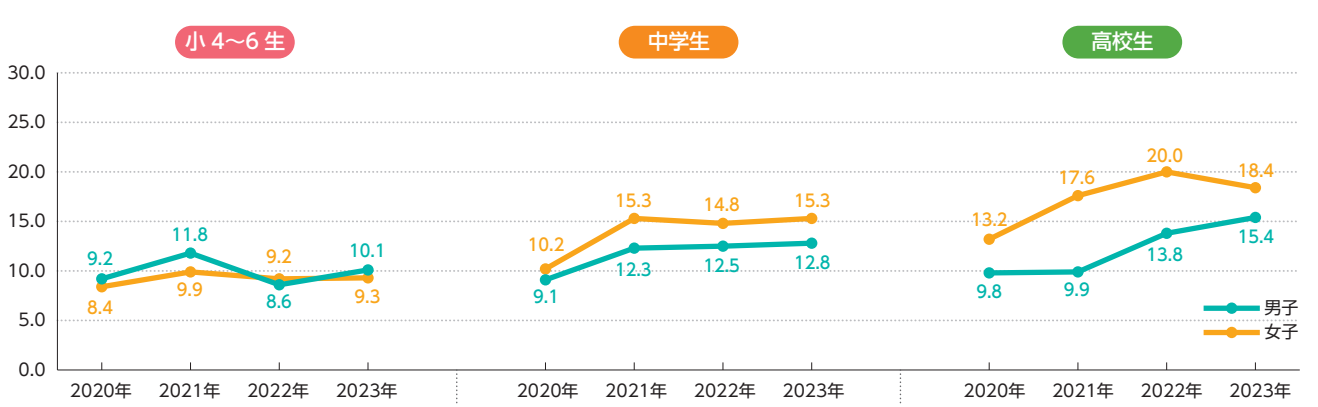
子ども回答



注　「学校に行きたくないことがある」は、2015年調査ではたずねていない。

図２－１－２　「学校に行きたくないことがある」の割合（性別）

子ども回答



注　「とてもあてはまる」の%。(図２－１－１、図２－１－２)

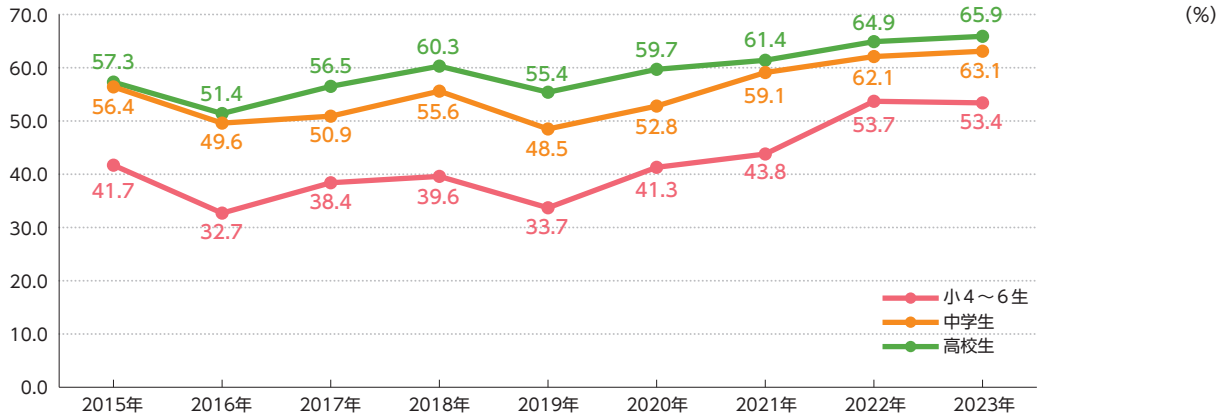
2 学習意欲

「勉強しようという気持ちがわかない」小中高校生は５～６割

「勉強しようという気持ちがわかない」と感じている小中高校生は 2019 年から 2022 年にかけて増え続け、2023 年は横ばいだった。とくに小４～６生の上昇幅が大きく、学習意欲の低下が顕著である。勉強する理由をたずねたところ、2020 年に比べて「先生や親にしかられたくないから」を選択した小中高校生は大幅に増加した。一方、「将来なりたい職業につきたい」（小中学生）、「自分の希望する（高校や）大学に進みたい」（小中学生）から勉強する子どもが減少した。将来の目標に向かって、勉強するという動機づけが弱まっている様子がうかがえる。

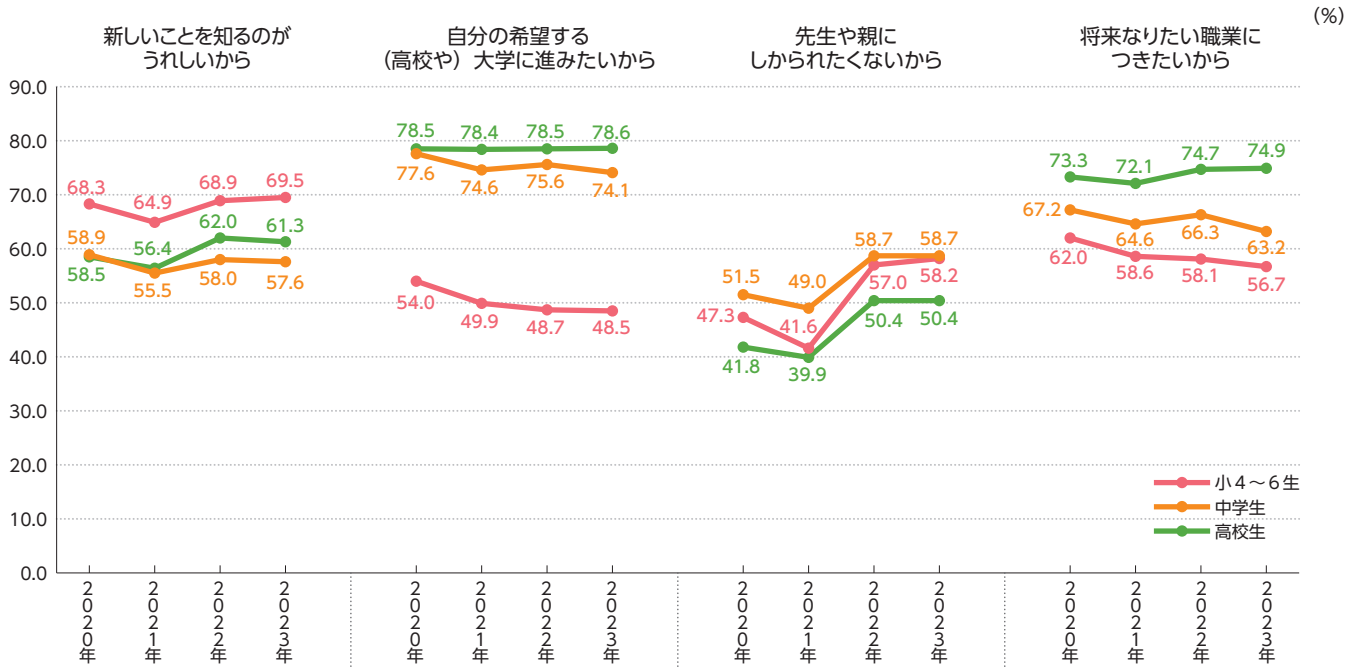
Q あなた自身のことについて、次のようなことはどれくらいあてはまりますか。

図２－２－１　「勉強しようという気持ちがわかない」の割合　子ども回答



Q あなたが勉強する理由について、次のことはどれくらいあてはまりますか。

図２－２－２　勉強する理由　子ども回答



注　「とてもあてはまる＋まああてはまる」の%。(図２－２－１、図２－２－２)

3 学習方法

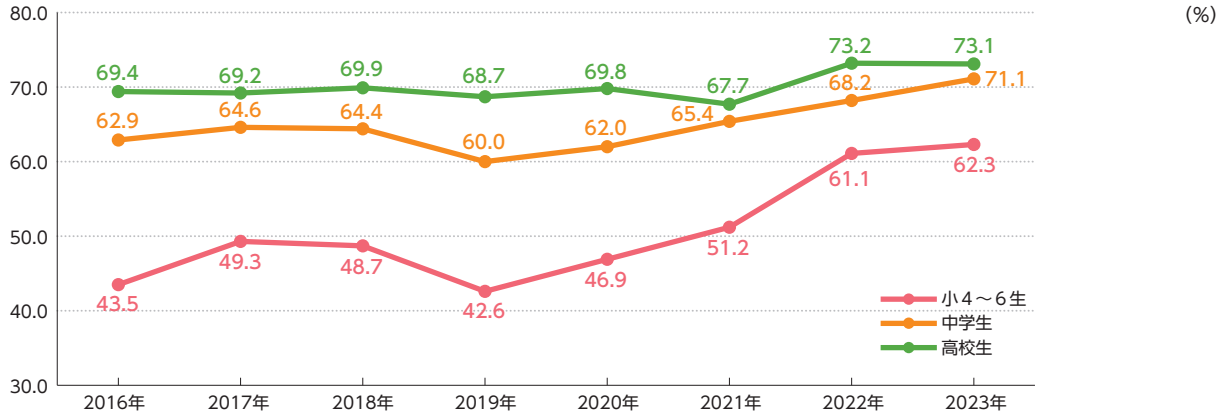
「上手な勉強のしかたがわからない」小中高校生は６～７割

「上手な勉強のしかたがわからない」小中学生は 2019 年から、高校生は 2021 年から増加傾向にある。とくに小中学生の増加幅が大きく、小４～６生の６割（「とてもあてはまる＋まああてはまる」）、中高生の７割は勉強のしかたに悩んでいる様子だ。使っている学習方法も全般的に減少傾向にある。特に小４～６生の減少幅が大きく、2020 年に比べて「何が分かっていないか確かめながら勉強する」では５割から４割に、「問題を解いた後、ほかの解き方がないかを考える」では４割弱から３割に減った。さらに、「友だちと勉強を教えあう」「計画を立てて勉強をする」では小中高校生ともに減少した。

Q あなた自身のことについて、次のようなことはどれくらいあてはまりますか。

図２－３－１ 「上手な勉強のしかたがわからない」の割合

子ども回答

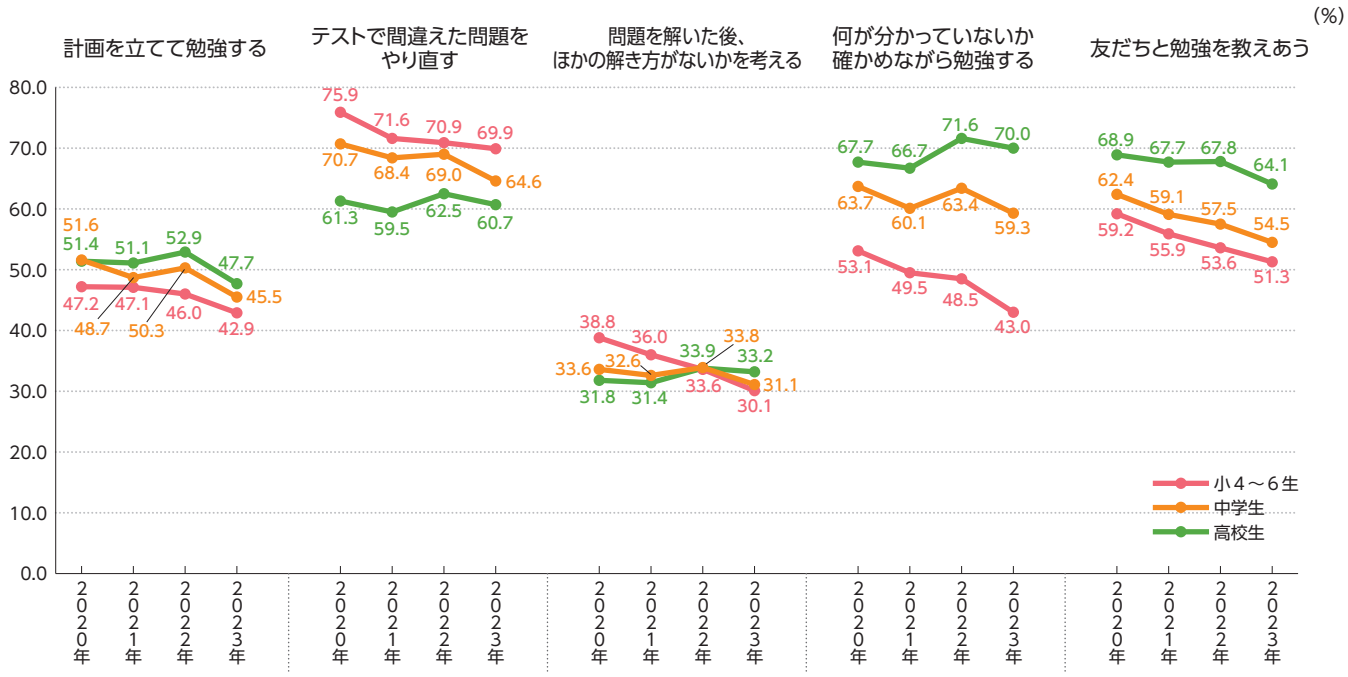


注１　「とてもあてはまる＋まああてはまる」の%。
注２　2015年調査では、たずねていない。

Q あなたは、勉強するときに、次のことをどれくらいしますか。

図２－３－２ 学習方法

子ども回答



注　「よくする＋ときどきする」の%。

4 学習時間

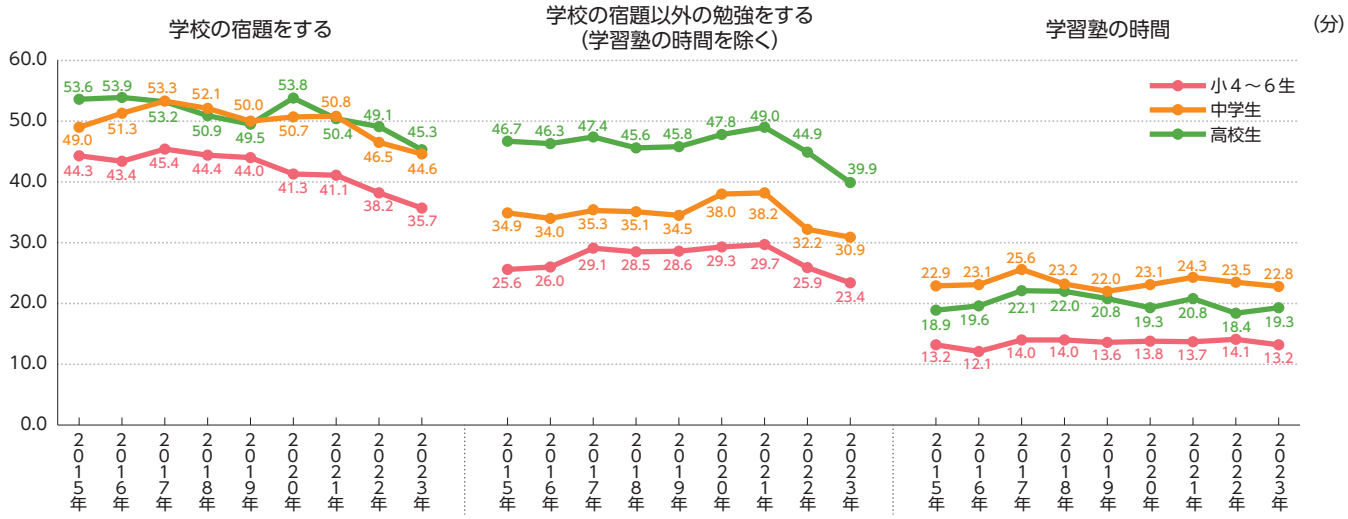
学校の宿題をする時間も宿題以外の勉強をする時間も減少

2015年からの学習時間の推移をみると、学校の宿題時間も宿題以外の勉強時間も、調査年による増減があるものの、全体的には減少傾向にあり、とくに宿題時間の減少幅が大きい。一方、宿題以外の勉強時間では高校生の減少幅が大きい。また、デジタル機器を使って学校の宿題をする子どもは5～7割弱（「月に1回以下」～「ほぼ毎日」の合計）で、どの学校段階でも2020年から増加し、かつ段階が低いほど増加幅が大きい。コロナ禍を契機に学校に一人一台端末が導入されたことによる影響だと考えられる。ただし、デジタル機器を使って学校の宿題以外の勉強をする子どもは3～4割である。どの学校段階でも2020年に比べ減少し、かつ学校段階が高いほど減少幅が大きい傾向がみられる。

Q あなたはふだん（学校がある日）、次のことを、1日にどれくらいの時間やっていますか。学校の中でやる時間は除いてください。日によって違うときは、平均してだいたいの時間を教えてください。

図2－4－1　学習時間

子ども回答



学習時間の総計

（分）

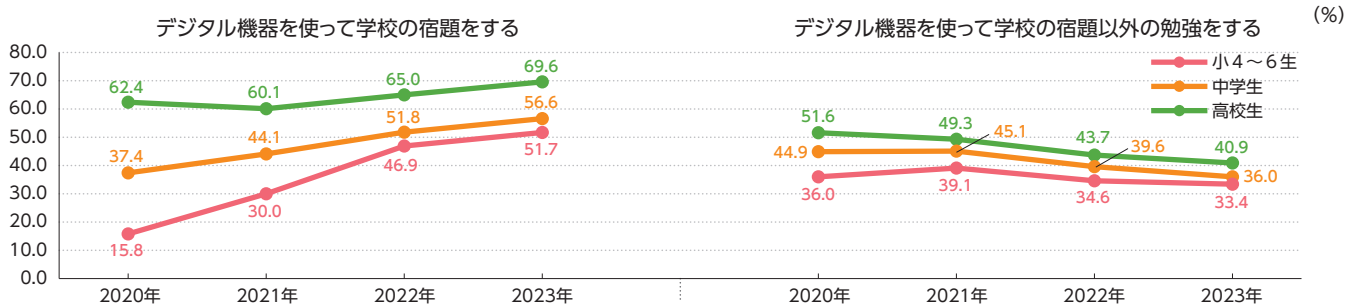
	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年	2020年	2021年	2022年	2023年
小4～6生	82.9	81.3	88.3	86.7	86.4	84.5	84.3	78.2	72.3
中学生	106.9	108.5	113.9	110.3	106.9	111.7	113.0	102.1	98.3
高校生	119.4	119.4	123.2	118.5	116.5	120.7	119.9	112.4	104.5

注1　「学校の宿題をする時間」「学校の宿題以外の勉強をする時間」の平均時間は、「しない」を「0分」、「4時間」を「240分」、「4時間以上」を「300分」などと置き換えて算出。
注2　「学習塾の時間」の平均時間は、「通っていない」と回答した子どもを0分、「通っている」と回答した子どものうち「1回にどれくらいの時間、勉強していますか」という質問に対して、「30分」を30分、「1時間」を60分、「4時間」を240分、「4時間以上」を270分のように置き換え、週あたりの通塾回数をかけあわせて7で割って算出。
注3　学習時間の総計は「学校の宿題をする時間」＋「学校の宿題以外の勉強をする時間（学習塾の時間を除く）」＋「学習塾の時間」の平均時間。

Q あなたはふだん（学校がある日）、次のことをするために、デジタル機器をどれくらい使っていますか。学校の中でやる時間は除いてください。

図2－4－2　「デジタル機器を使って学校の宿題・宿題以外の勉強をする」の割合

子ども回答



注　ふだん、デジタル機器の使用頻度をたずねる質問で、「月に1回以下」～「ほぼ毎日」の合計（%）。

5 学びでのデジタル機器の利用　①学校での利用

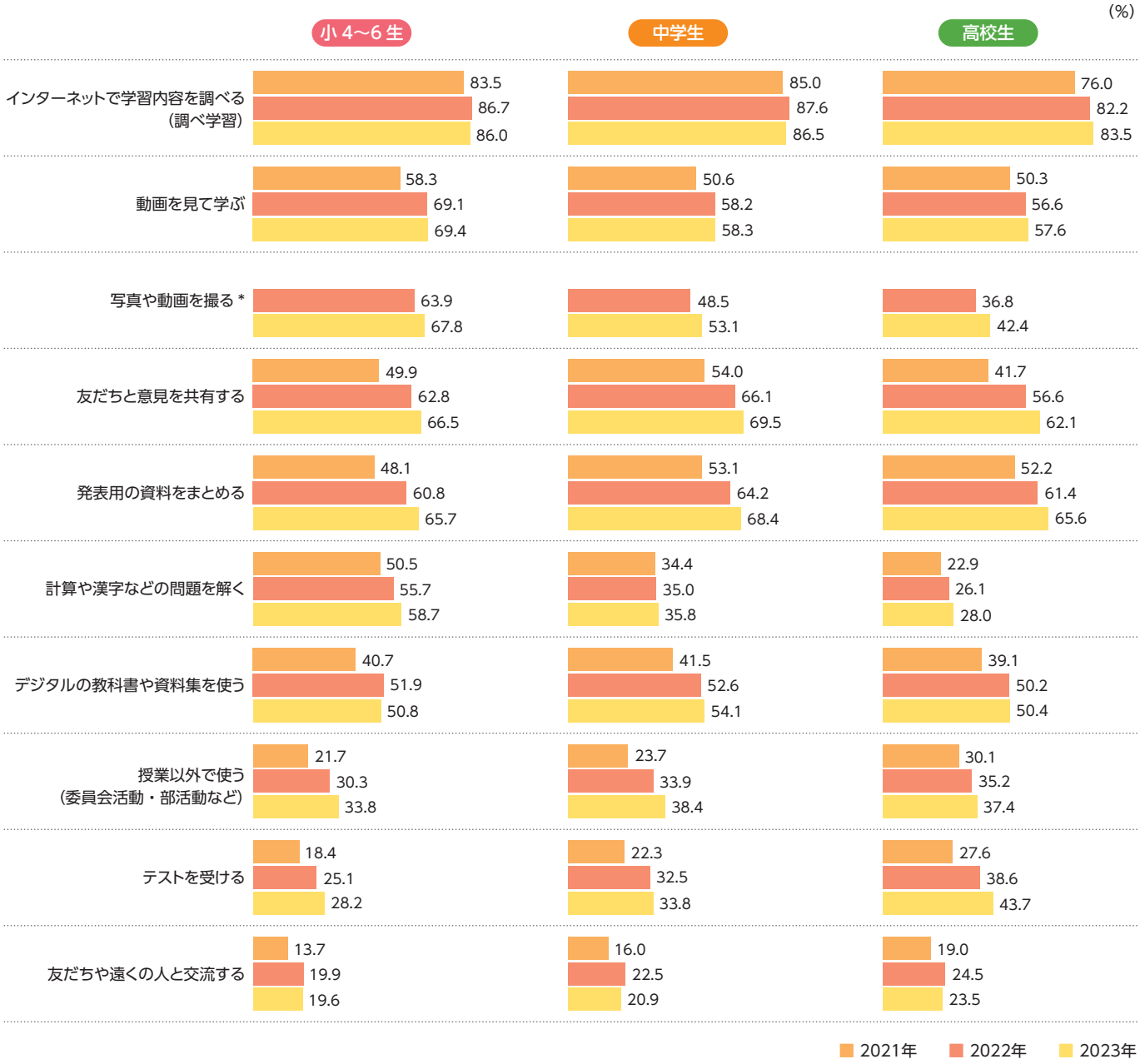
「友だちと意見を共有する」「発表用の資料をまとめる」といった使い方が 2021年から増え続けている

学校でのデジタル機器の利用用途をたずねたところ、2021 年に比べて多くの項目で「よくする＋ときどきする」と回答した小中高校生の割合が 10 ポイント以上伸びている。小中高校生とも「発表用の資料をまとめる」「友だちと意見を共有する」「デジタルの教科書や資料集を使う」といった使い方が大幅に増加した。また、「動画を見て学ぶ」小４～６生は７割弱に増えた。さらにデジタル機器を使って「テストを受ける」高校生は 2021 年から伸び続け、2023 年には４割を上回った。

Q 学校ではデジタル機器を使って、次のようなことをどれくらいしていますか。

図２－５－１　学校でのデジタル機器の利用用途

子ども回答



注１　「よくする＋ときどきする」の%。
注２　「*」がついている項目は、2021 年調査ではたずねていない。
注３　2023 年の小４～６生の数値の降順に示す。

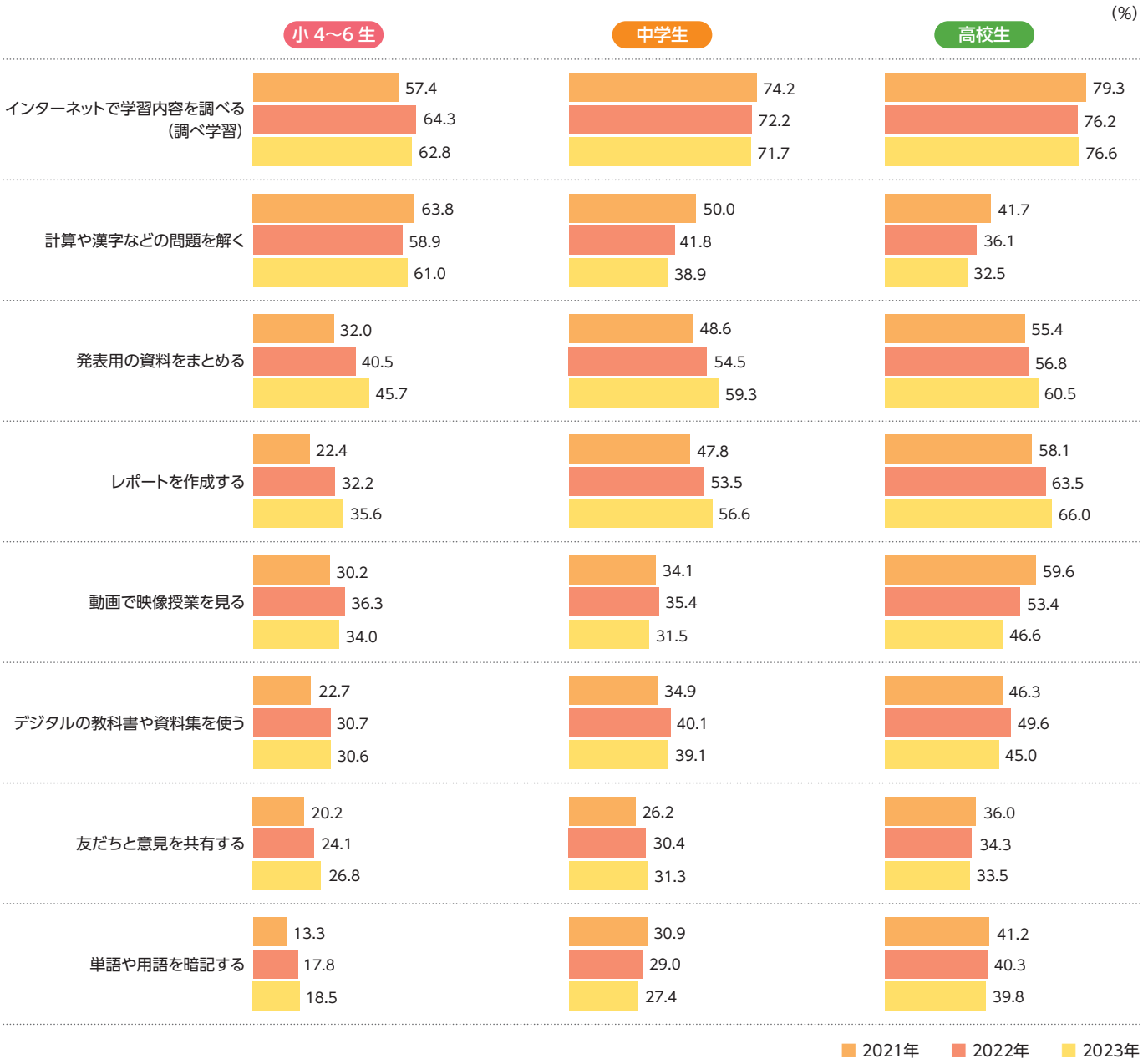
5 学びでのデジタル機器の利用　②学校のデジタル機器の家庭での利用

学校から持ち帰ったデジタル機器の用途では、小中高校生ともに調べ学習の割合がもっとも高い

学校から持ち帰ったデジタル機器を使って取り組んでいる学習内容をたずねたところ、「発表用の資料をまとめる」「レポートを作成する」は 2021 年から３年連続で増加した。一方で、デジタル機器を使って「計算や漢字などの問題を解く」中高生は 2021 年から減り続けているが、小４～６生はほぼ横ばいである。さらに学校のデジタル機器を持ち帰って「動画で映像授業を見る」は、高校生で 2021 年から減り続けてはいるものの、４割強が利用している。

Q 家では、学校で使用するあなた専用のデジタル機器をどのように使っていますか。

図２－５－２　学校から持ち帰ったデジタル機器を使った家庭での学習内容　子ども回答



注１　「よくする＋ときどきする」の%。
注２　2023年の小４～６生の数値の降順に示す。

5 学びでのデジタル機器の利用　③デジタル機器利用の効果と影響

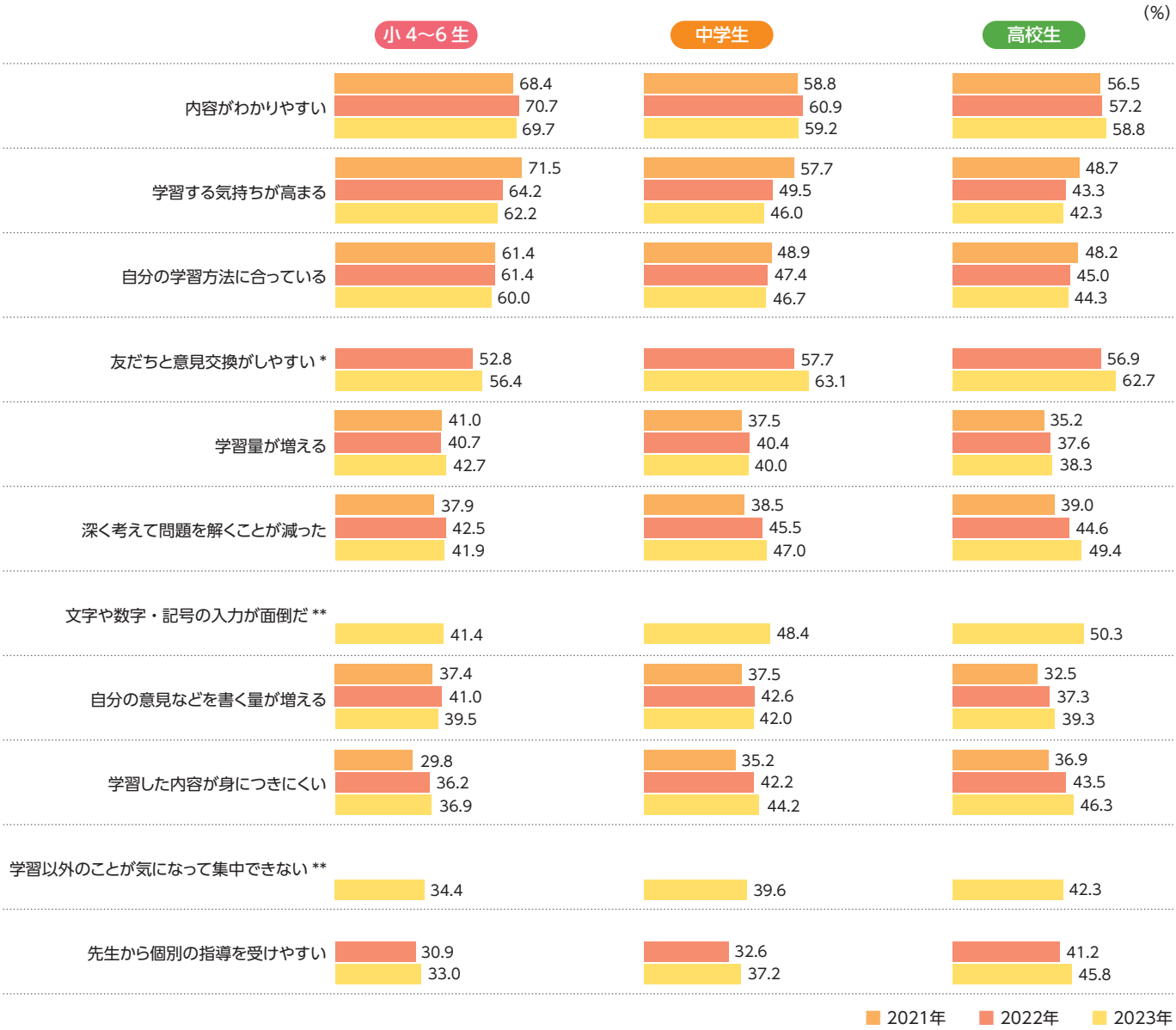
デジタル機器の利用で「学習する気持ちが高まる」と感じる小中高校生は３年連続で減少

デジタル機器を使った学習の効果をみると、小４～６生では「内容がわかりやすい」（約７割「とてもそう思う＋まあそう思う」）、中高生では「友だちと意見交換しやすい」（６割）がもっとも高い。また、４割前後の小中高校生は「自分の意見などを書く量が増える」と感じている。一方、デジタル機器を使った学習は「深く考えて問題を解くことが減った」と感じる中高生は 2021 年から増加した。「学習以外のことが気になって集中できない」小４～６生は３割、中学生は４割弱で、高校生になると４割を超えている。デジタル機器を使った学習の効果を実感している子どもも多いが、マイナス面の意識が強まっているようである。

Q デジタル機器を使った学習は、紙での学習に比べて、どのように感じますか。

図２－５－３　デジタル機器を使った学習の効果と影響

子ども回答



注１　「とてもそう思う＋まあそう思う」の%。
注２　「*」がついている項目は、2021 年調査ではたずねていない。「**」がついている項目は、2021 年調査と 2022 年調査ではたずねていない。
注３　2023 年の小４～６生の数値の降順に示す。

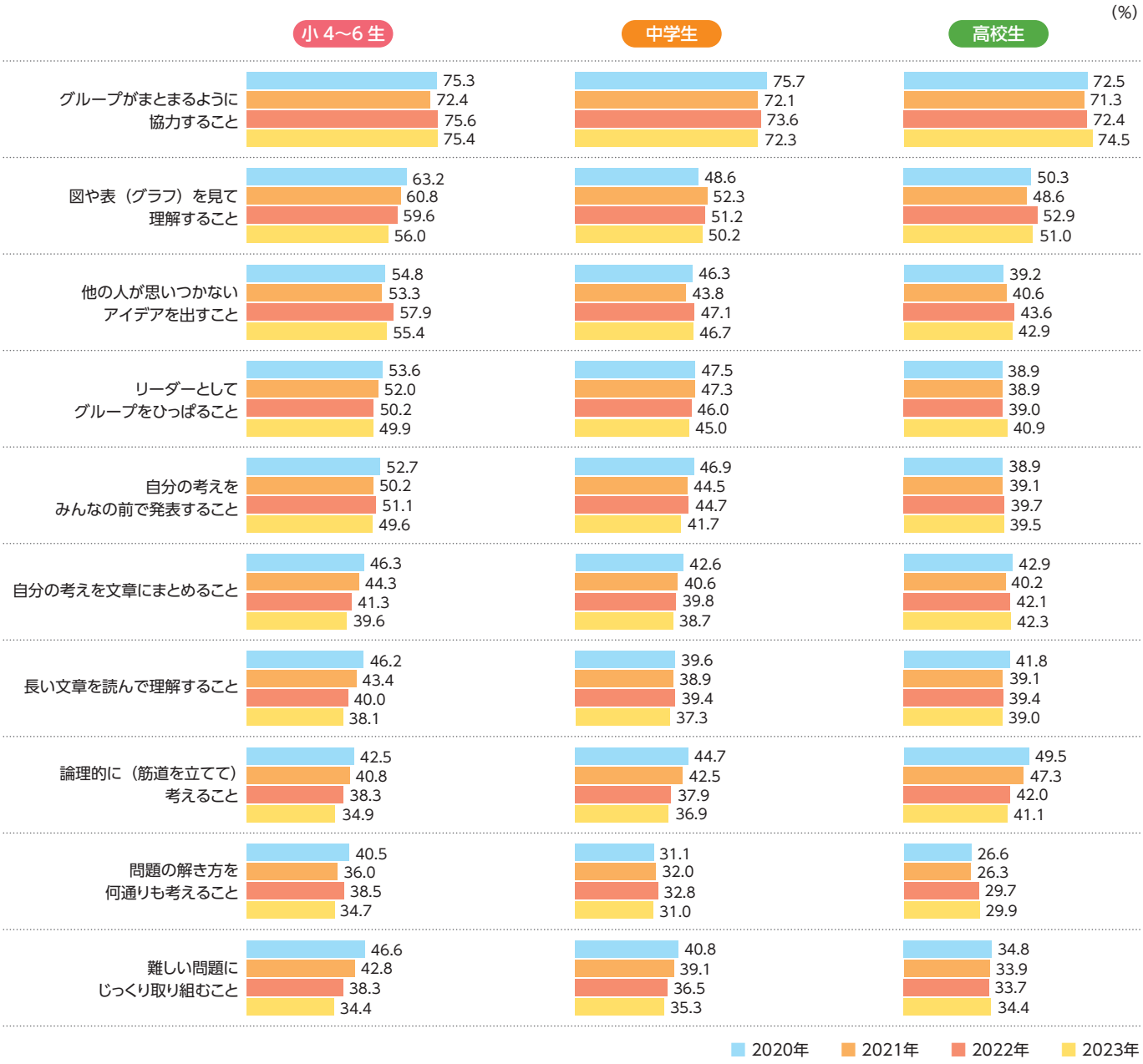
6 得意・苦手（子どもの自己評価）

「論理的に考えること」が「得意」と感じる小中高校生は大幅に減少

子どもの自己評価について 2020 年からの主な変化をみると、「論理的に考えること」が低下したこと以外に、「難しい問題にじっくり取り組むこと」（小中学生）、「長い文章を読んで理解すること」（小４～６生）、「図や表を見て理解すること」（小４～６生）、「自分の考えを文章にまとめること」（小４～６生）、「自分の考えをみんなの前で発表すること」（中学生）などの項目で「とても得意＋やや得意」と回答した割合が減少した。とくに、小４～６生の自己評価の低下が顕著である。

Q あなたは次のようなことが得意ですか、苦手ですか。

図２－６－１　得意・苦手　　子ども回答



注１　「とても得意＋やや得意」の%。
注２　2023年の小４～６生の数値の降順に示す。

1 保護者のかかわり

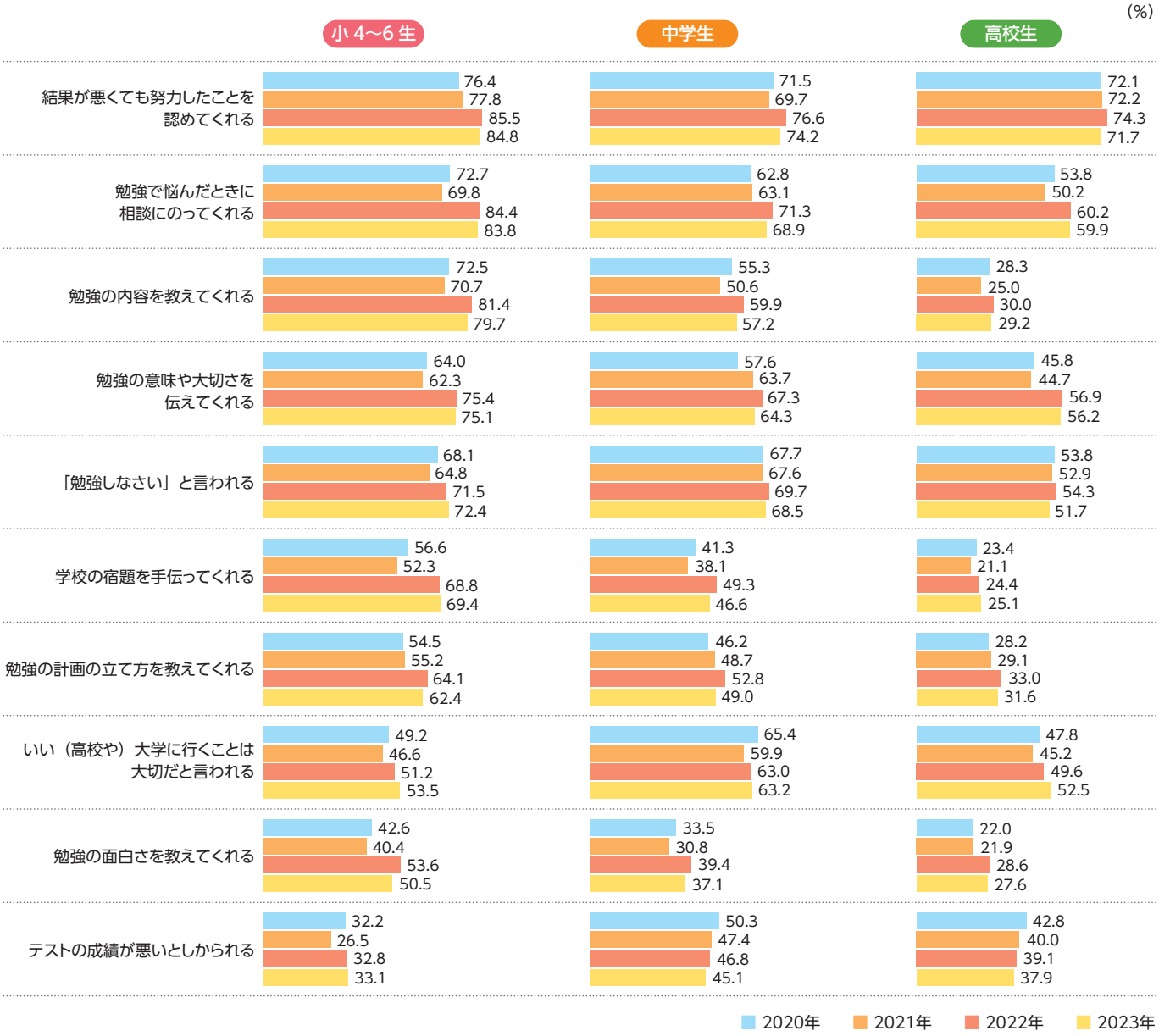
保護者が「勉強の意味や大切さを伝えてくれる」「勉強で悩んだときに相談にのってくれる」と感じる小中高校生が増加

学校段階別でみると、小４～６生は多くの項目で保護者のかかわりが増えたととらえている。たとえば、「結果が悪くても努力したことを認めてくれる」「勉強の計画の立て方を教えてくれる」などのかかわりが増加したほか、「『勉強しなさい』と言われる」ことも増えている。さらに「学校の宿題を手伝ってくれる」といった保護者のかかわりをみると、小４～６生では 2020 年の５割強から、2023 年の７割弱となった。一方で、「テストの成績が悪いとしかられる」と感じる中高生は減っている。子どもに寄り添い、子どもの教育にさらに熱心になっている保護者の姿が浮き彫りになった。

Q お父さんやお母さんのあなたに対するかかわりについて、次のようなことはどれくらいあてはまりますか。

図３－１－１　保護者のかかわり

子ども回答



注１　「とてもあてはまる＋まああてはまる」の%。
注２　2023年の小４～６生の数値の降順に示す。

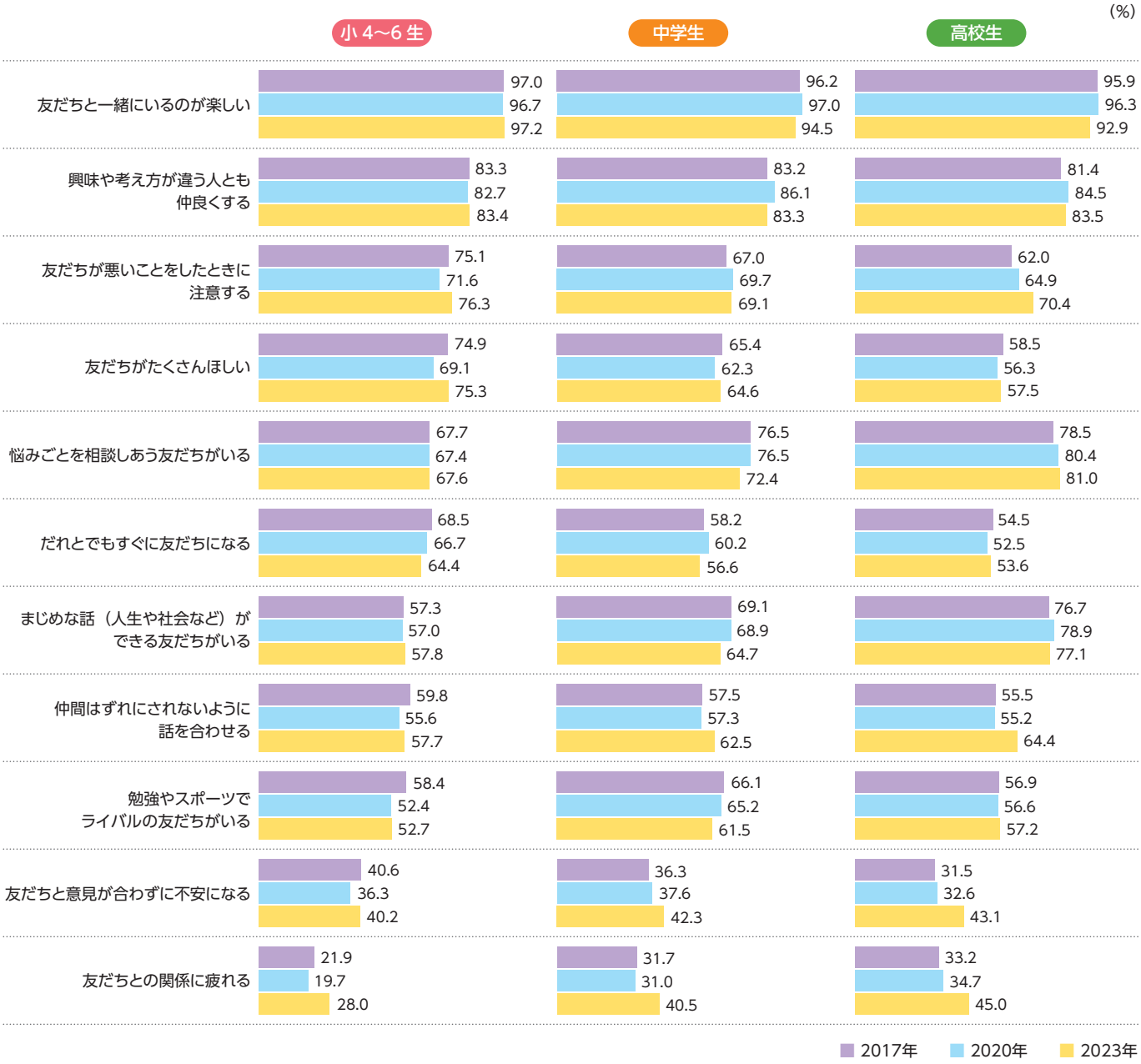
2 友だち関係

友だちとの関係に疲れを感じている小中高校生が増加

2017 年に比べ、「仲間はずれにされないように話を合わせる」「友だちと意見が合わずに不安になる」と感じる中高生が増え、友だちとの関係に気遣っている様子だ。「友だちが悪いことをしたときに注意する」高校生は増加した。「勉強やスポーツでライバルの友だちがいる」（小中学生）、「悩みごとを相談しあう友だちがいる」（中学生）、「まじめな話ができる友だちがいる」（中学生）、「だれとでもすぐ友だちになる」（小４～６生）の項目では 2017 年に比べて肯定する割合が減っている。友だちとの関係に悩みながらも、どの学校段階でも９割以上の子どもは「友だちと一緒にいるのが楽しい」と回答した。

Q 友だちとの関係について、次のことがどれくらいあてはまりますか。

図３－２－１　友だち関係　　子ども回答



注１　「とてもあてはまる＋まああてはまる」の%。
注２　2023年の小４～６生の数値の降順に示す。

1 自己認識

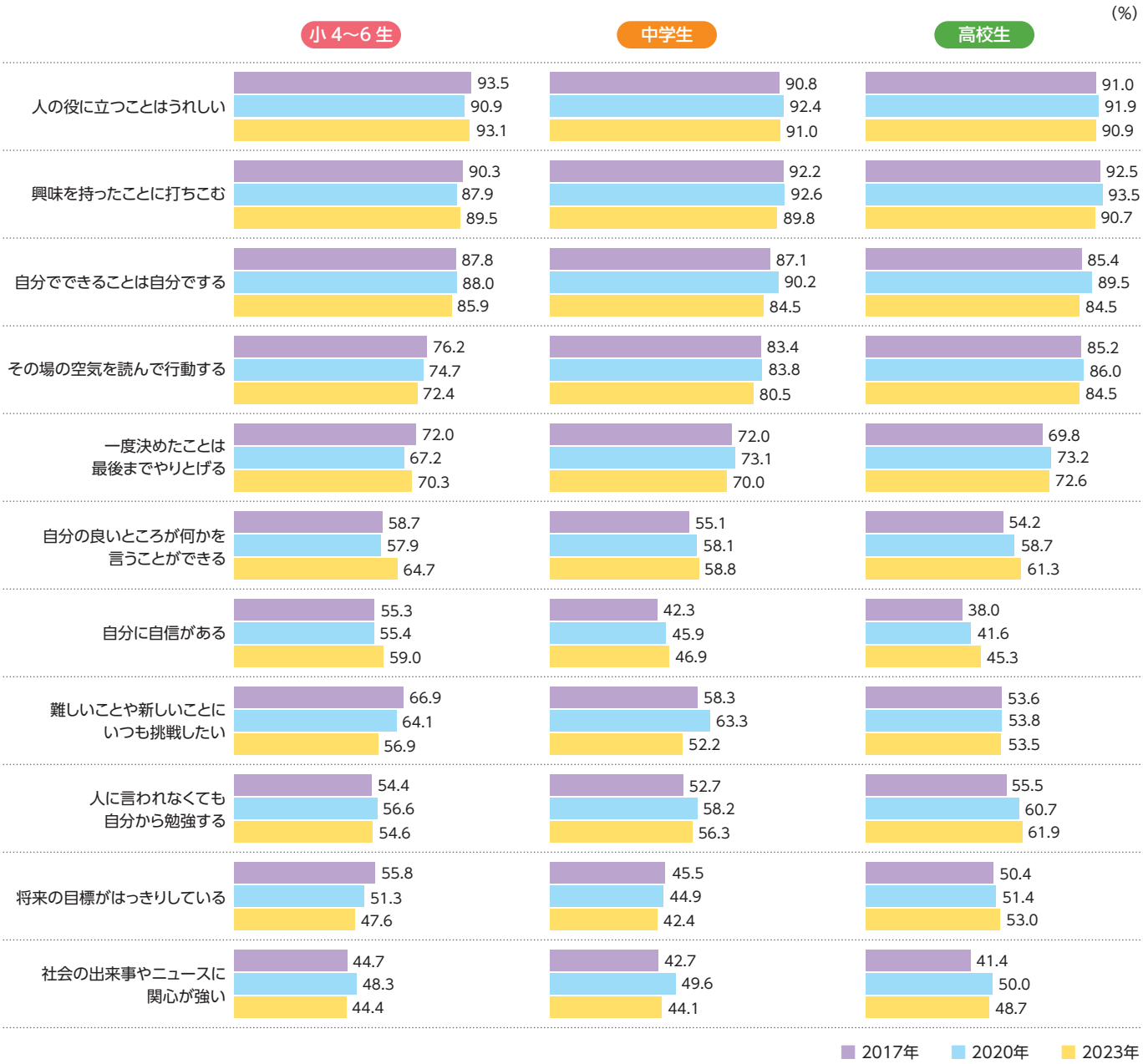
「自分の良いところが言える」「自信がある」と自己肯定感をもつ小中高校生が増加

子どもに自分自身のとらえかたをたずねた。どの学校段階でも、上位に入っているのは「人の役に立つことはうれしい」「興味を持ったことに打ちこむ」ことで、どの調査年も一貫して９割前後の子どもが「あてはまる」（「とてもあてはまる＋まああてはまる」）と回答している。2017 年に比べて「難しいことや新しいことにいつも挑戦したい」「将来の目標がはっきりしている」と回答した小中学生は減少した。

Q あなた自身のことについて、次のようなことはどれくらいあてはまりますか。

図４－１－１　自己認識

子ども回答



注１　「とてもあてはまる＋まああてはまる」の%。
注２　2023年の小４～６生の数値の降順に示す。

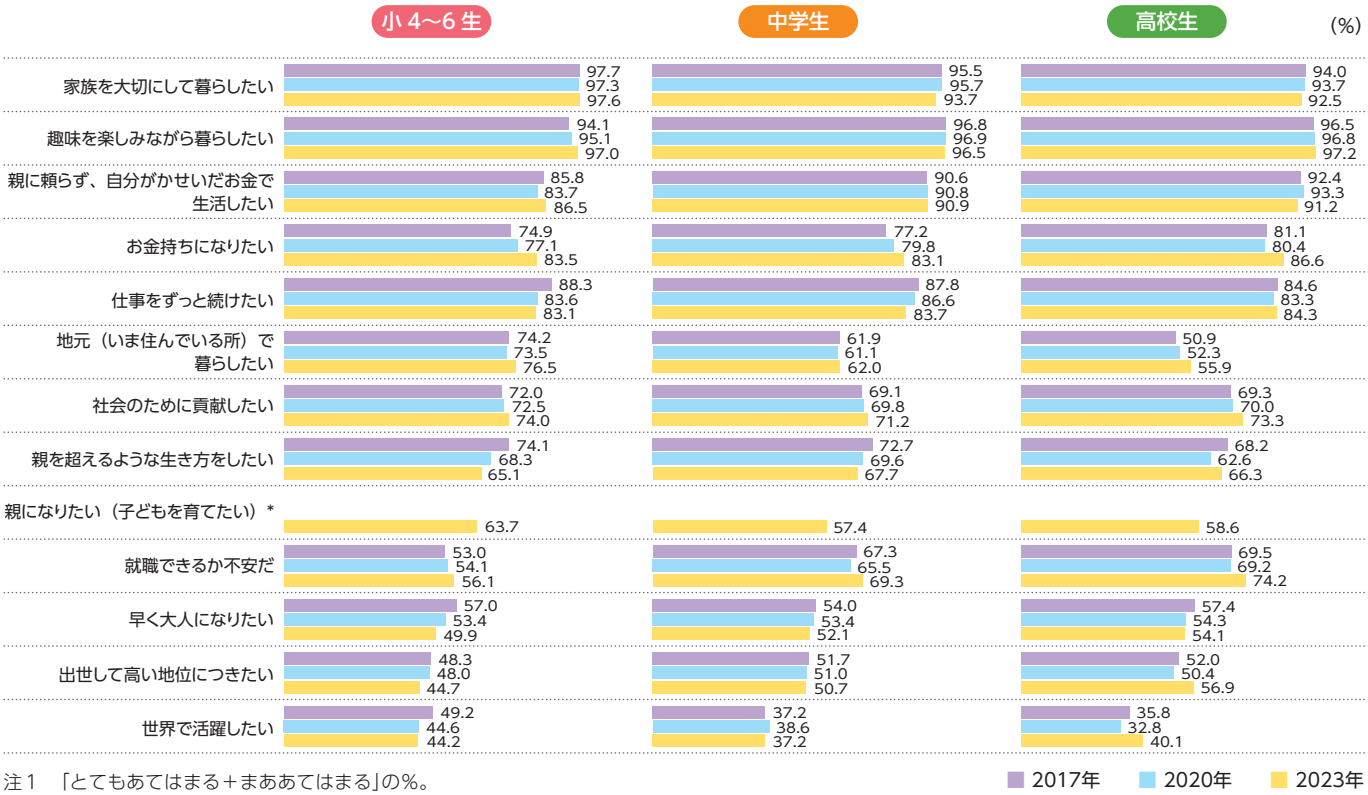
2 将来に対する意識

将来「お金持ちになりたい（なってほしい）」親子が増加

子どもに将来に対する意識をたずねたところ、2017年に比べて「仕事をずっと続けたい」（小中学生）、「親を超えるような生き方をしたい」（小中学生）、「早く大人になりたい」（小４～６生）と回答する割合は減少した。これに対して、高校生では「出世して高い地位につきたい」「世界で活躍したい」「地元で暮らしたい」「社会のために貢献したい」と考える割合が増えている。高校生は将来に対して、前向きな面がみえる。「就職できるか不安だ」については、保護者よりも子どものほうが高いが、保護者は不安が高まっていることがわかった。先が見えない不安を抱えている親子の様子がうかがえる。

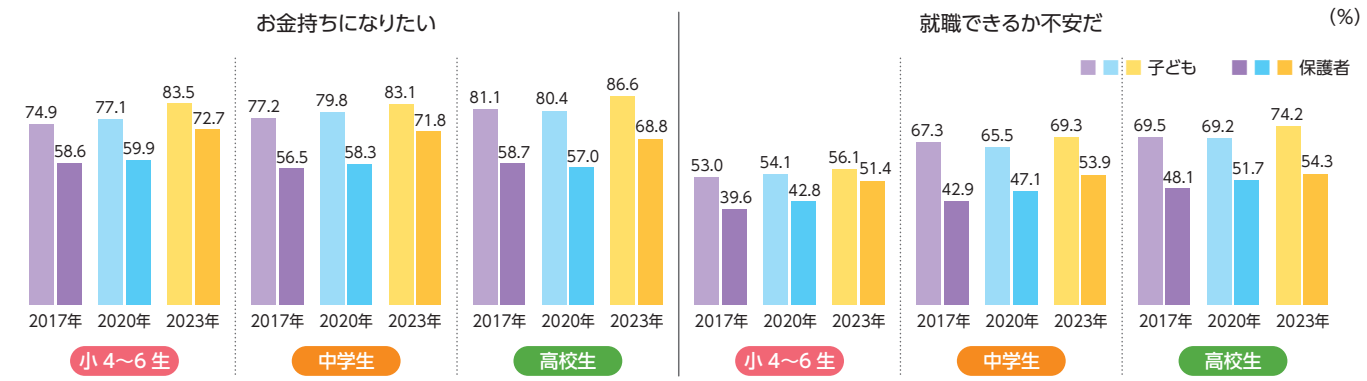
Q あなた自身の将来について、次のことはどれくらいあてはまりますか。（図４－２－１）
調査の対象となっているお子様の将来について、次のことはどれくらいあてはまりますか。（図４－２－２）

図４－２－１　将来に対する意識　子ども回答



注１　「とてもあてはまる＋まああてはまる」の%。
注２　「社会のために貢献したい」は小４～６生では、「社会の役に立ちたい」としている。
注３　「*」がついている項目は、2017年調査・2020年調査ではたずねていない。
注４　2023年の小４～６生の数値の降順に示す。

図４－２－２　親子の将来に対する意識　保護者回答　子ども回答



注１　「とてもあてはまる＋まああてはまる」の%。
注２　「お金持ちになりたい」は保護者票では、「お金持ちになってほしい」としている。

3 職業・仕事に対する意識

将来の仕事について「休みが多い」ことを重視する小中高校生が増加

どの調査年も、またどの学校段階でも職業に対して「安定している」を重視することがわかる。2017 年からの変化をみると、小中学生は多くの項目で「とても重視する」と回答した割合が減少した。そのなかで、すべての学校段階で共通して増えているのは、「休みが多い」ことである。将来なりたい職業が「ある」と回答した割合をみると、小中学生は 2020 年に減少していたが、2023 年では 2017 年なみにもどった。高校生は 2017 年を上回り、5 割となった。

Q あなたは、将来、職業(仕事)を選ぶとき、次のことをどれくらい重視すると思いますか。

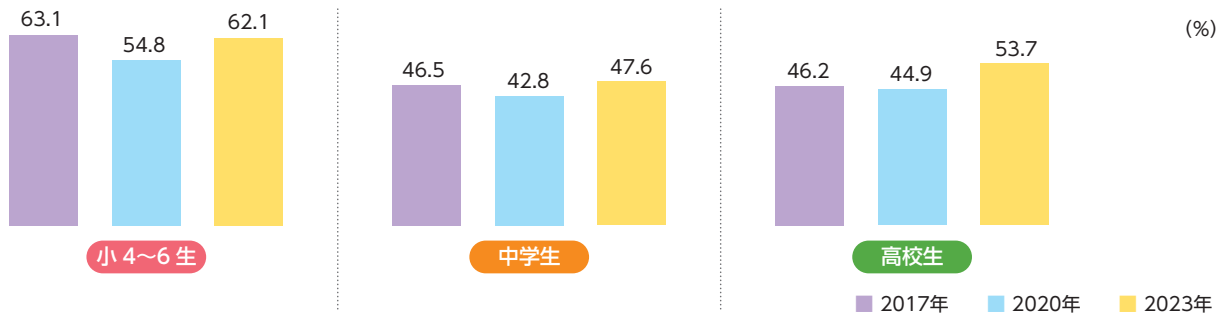
図4－3－1　職業・仕事に対する意識　子ども回答

(%)

		小4～6生 とても重視する	小4～6生 まあ重視する	小4～6生	中学生 とても重視する	中学生 まあ重視する	中学生	高校生 とても重視する	高校生 まあ重視する	高校生
安定している	2017年	56.3	36.7	93.0	55.7	40.1	95.8	49.6	46.0	95.6
	2020年	55.7	36.1	91.8	55.9	39.3	95.2	48.7	47.1	95.8
	2023年	48.8	45.3	94.1	50.8	44.7	95.5	52.2	43.5	95.7
自分の夢をかなえられる	2017年	60.4	29.7	90.1	49.3	37.7	87.0	42.4	43.1	85.5
	2020年	58.4	30.6	89.0	50.4	36.4	86.8	40.3	44.0	84.3
	2023年	53.0	39.6	92.6	44.3	44.4	88.7	43.0	44.1	87.1
給料が多い	2017年	43.9	41.4	85.3	42.3	49.2	91.5	38.9	54.7	93.6
	2020年	45.5	39.5	85.0	44.9	47.6	92.5	38.5	54.1	92.6
	2023年	41.4	48.4	89.8	43.8	49.0	92.8	44.7	49.0	93.7
学んだことを生かせる	2017年	47.5	39.1	86.6	37.7	44.8	82.5	36.0	48.9	84.9
	2020年	45.1	39.3	84.4	37.8	44.1	81.9	33.6	49.5	83.1
	2023年	35.5	51.4	86.9	30.7	50.2	80.9	32.9	50.0	82.9
休みが多い	2017年	22.9	40.8	63.7	24.9	52.1	77.0	28.8	55.1	83.9
	2020年	24.2	41.3	65.5	28.2	51.9	80.1	30.0	56.8	86.8
	2023年	30.8	52.0	82.8	34.1	54.7	88.8	38.9	52.5	91.4
男性も女性も働きやすい	2017年	46.1	35.0	81.1	37.5	42.0	79.5	32.0	45.9	77.9
	2020年	46.4	34.1	80.5	40.6	40.5	81.1	32.0	47.7	79.7
	2023年	35.7	44.4	80.1	33.9	47.4	81.3	35.6	46.2	81.8
社会の役に立つ	2017年	36.1	39.8	75.9	30.8	44.7	75.5	27.2	47.6	74.8
	2020年	35.6	39.7	75.3	32.4	45.5	77.9	26.6	48.8	75.4
	2023年	29.1	50.6	79.7	24.2	49.3	73.5	26.1	49.7	75.8
人と直接かかわる	2017年	28.6	37.5	66.1	19.9	37.0	56.9	19.3	38.1	57.4
	2020年	26.4	36.8	63.2	20.2	38.6	58.8	16.9	39.7	56.6
	2023年	18.9	44.2	63.1	16.5	40.2	56.7	19.1	36.4	55.5
有名な会社である	2017年	13.9	41.6	55.5	10.4	49.1	59.5	11.6	51.1	62.7
	2020年	13.9	40.8	54.7	11.5	46.7	58.2	9.9	49.5	59.4
	2023年	9.7	40.9	50.6	10.5	46.1	56.6	12.8	48.8	61.6
独立してできる(自営業など)	2017年	12.5	23.9	36.4	7.9	19.0	26.9	6.1	15.5	21.6
	2020年	12.2	21.8	34.0	8.7	19.8	28.5	6.7	19.4	26.1
	2023年	9.4	22.6	32.0	7.5	21.1	28.6	8.4	18.0	26.4

Q あなたには、将来なりたい職業(やりたい仕事)はありますか。

図4－3－2　将来なりたい職業が「ある」の割合　子ども回答



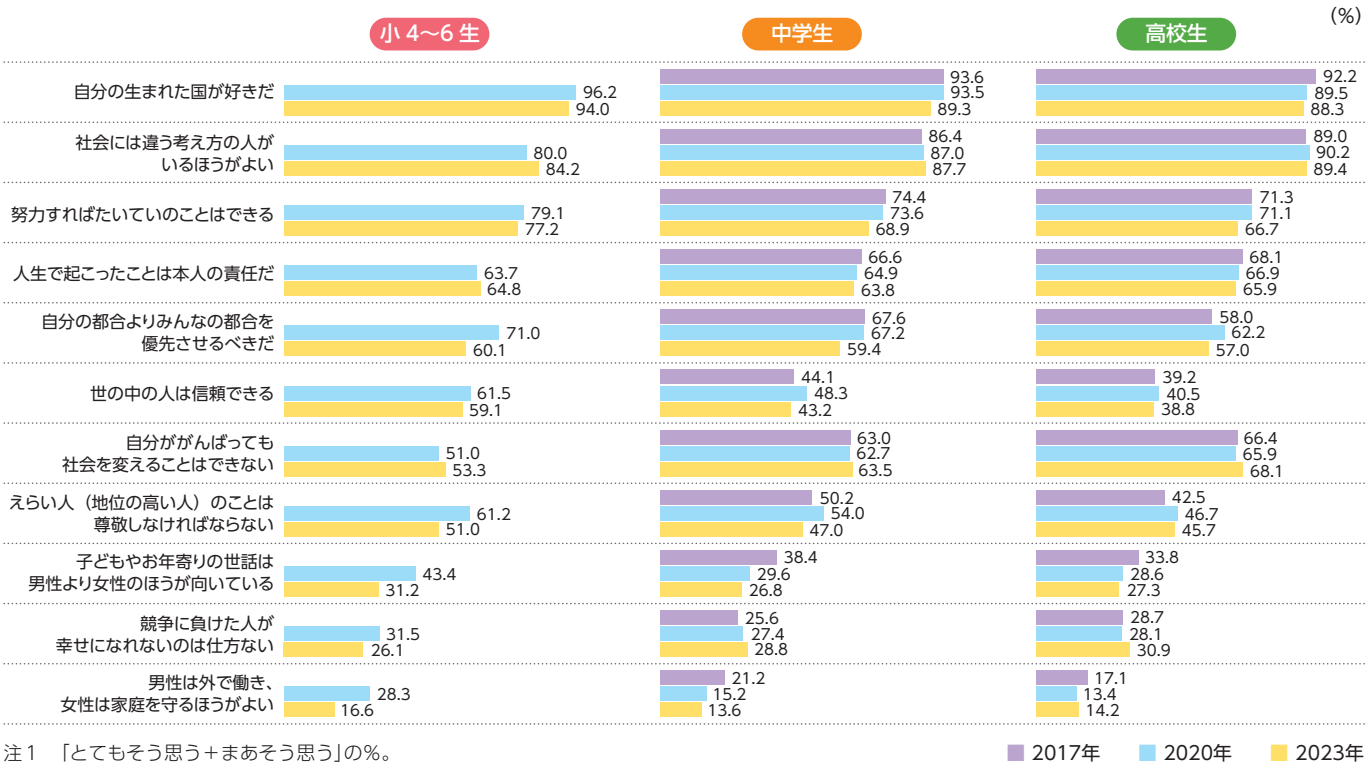
4 社会に対する意識

「自分の都合よりみんなの都合を優先させるべきだ」と考えている小中高校生が減少

子どもの社会に対する意識をみると、「子どもやお年寄りの世話は男性より女性のほうが向いている」「男性は外で働き、女性は家庭を守るほうがよい」などの性別役割分業意識をもつ小中高校生が減り、学校段階による差が縮まった。さらに、2020年に比べて「自分の都合よりみんなの都合を優先させるべきだ」「えらい人のことは尊敬しなければならない」と思う小中学生は減少している。保護者にも社会に対する意識をたずねたが、子どもと同様に保護者も、「努力すればたいていのことはできる」「世の中の人は信頼できる」が減少している。

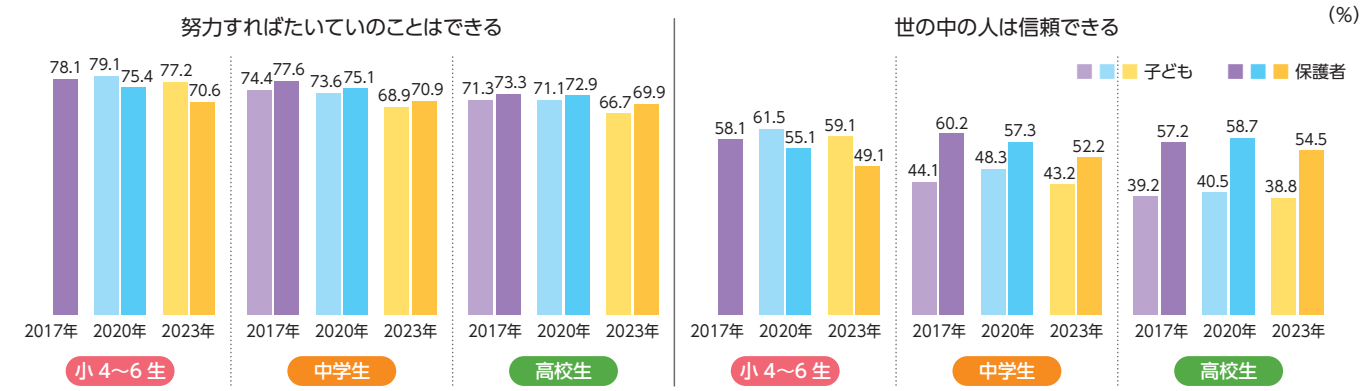
Q あなたは、次のことについてどう思いますか。

図４－４－１　社会に対する意識　子ども回答



注１　「とてもそう思う＋まあそう思う」の%。
注２　2017年調査では、小４～６生にはたずねていない。
注３　2023年の小４～６生の数値の降順に示す。

図４－４－２　親子の社会に対する意識　保護者回答　子ども回答



注１　「とてもそう思う＋まあそう思う」の%。
注２　2017年調査では、小４～６生にはたずねていない。

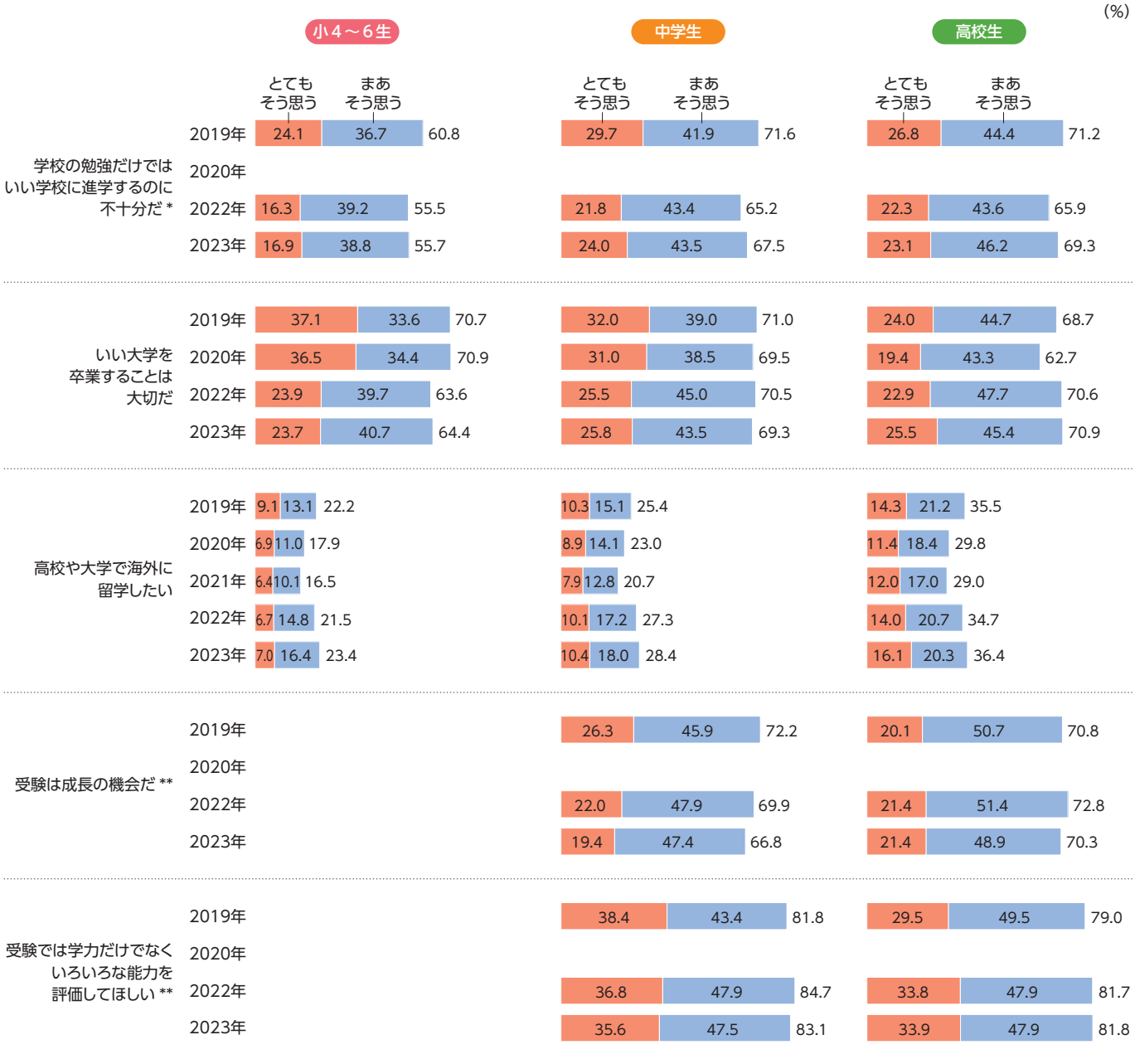
5 受験・進学に対する意識

「学校の勉強だけではいい学校に進学するのに不十分だ」と思っている小中学生が減少

進学に対する意識をみると、「いい大学を卒業することは大切だ」は、2019年では7割の小4～6生が「そう思う」（「とてもそう思う＋まあそう思う」）と回答したが、2023年では6割に下がり、いい大学を志向する意識が弱まっている。中高生にはさらに受験に対する意識をたずねてみたところ、「受験は成長の機会だ」に「そう思う」中学生が減っている。受験に対するとらえ方に変化がみられた。

Q あなたは、次のことについてどう思いますか。

図4－5－1　受験・進学に対する意識　　子ども回答



注　「*」がついている項目は、2020年調査ではたずねていない。「**」がついている項目は、小4～6生にはたずねていない。中高生については、2020年調査ではたずねていない。

1 さまざまな満足度

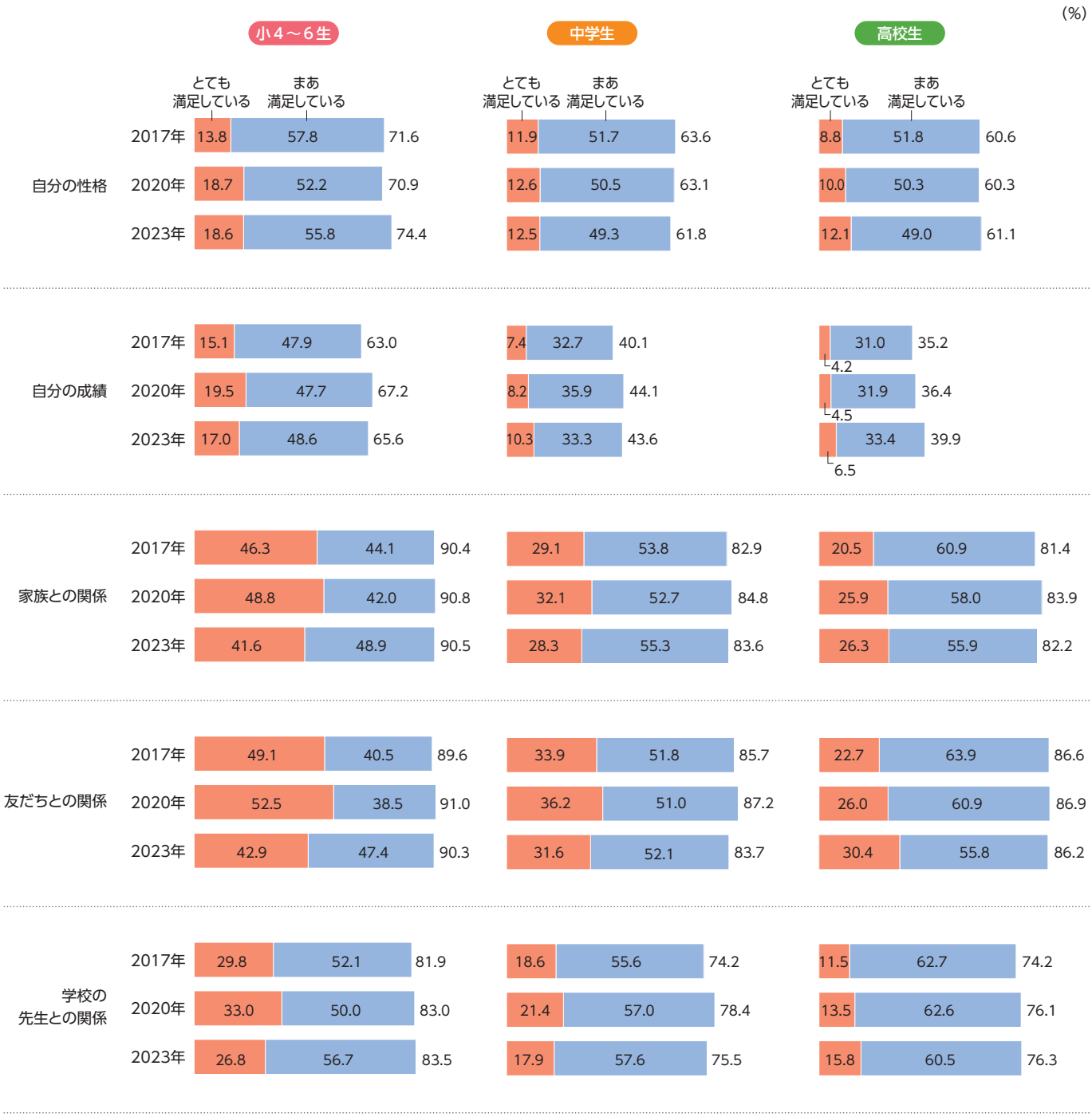
「自分の成績」に対する満足度は向上

子どもにさまざまな満足度についてたずねた。多くの項目で、満足度には変化がみられないなかで、中高生は 2017 年に比べて「自分の成績」に対する満足度（「とても満足している＋まあ満足している」）がやや高まっている。また「友だちとの関係」「家族との関係」「学校の先生との関係」に「とても満足している」小４～６生は減少しているのに対して、高校生では増えている。小中高校生ともに、「とても満足している」の割合がもっとも高いのは「友だちとの関係」である。

Q あなたは、次のことにどれくらい満足していますか。

図５－１－１　さまざまな満足度

子ども回答



2 親子の幸福感

2017年に比べて「今、幸せだ」「将来、幸せになれる」と思う中高生がわずかに減少

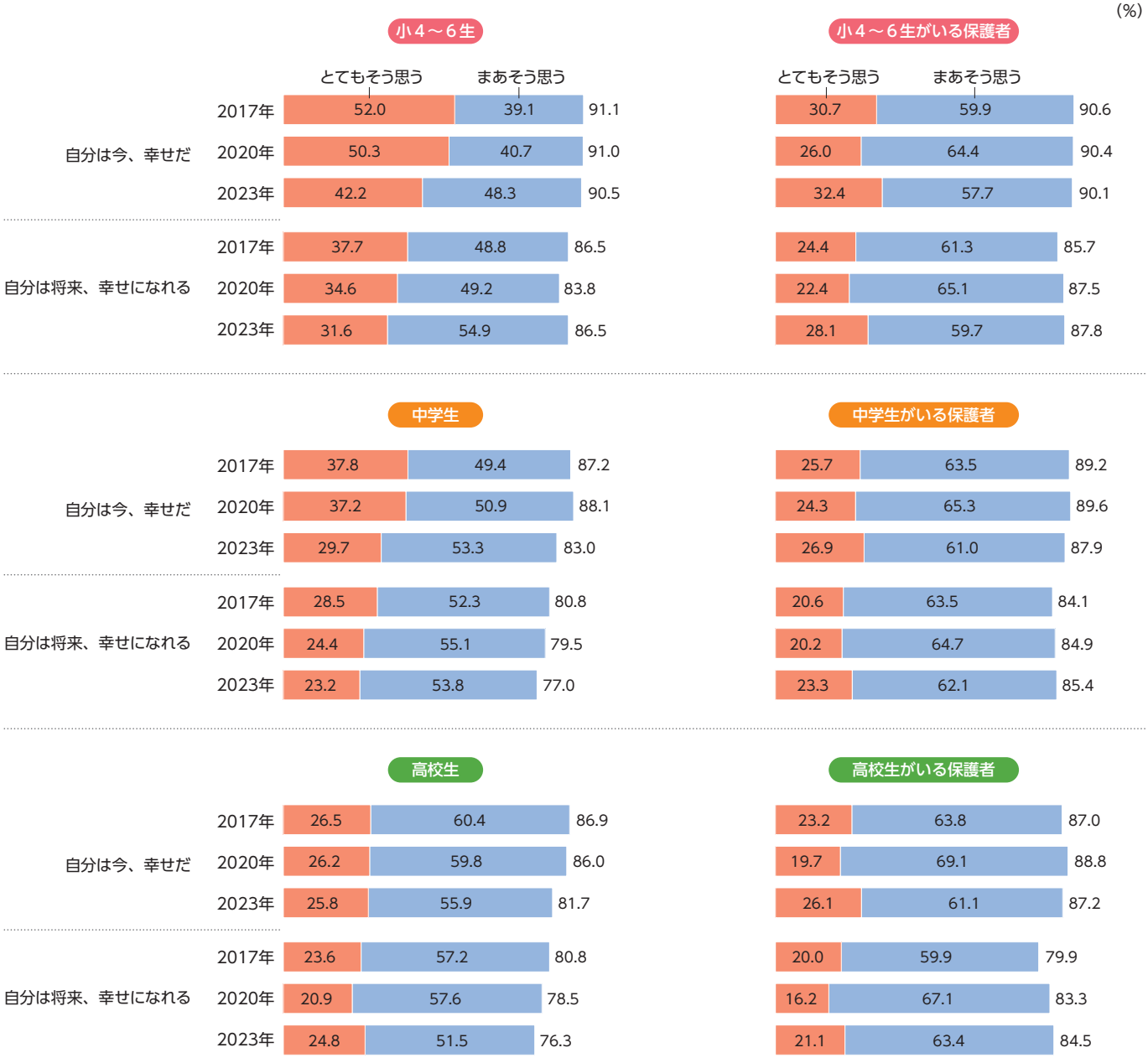
親子に自身の幸福感についてたずねてみた。「今、幸せだ」に「そう思う」（「とてもそう思う＋まあそう思う」）小中高校生は８～９割いる。全体的に小４～６生は中高生より幸福感が高いが、「とてもそう思う」割合は 2017 年から減っている。同様に、「自分は将来、幸せになれる」に「そう思う」小中高校生は７～８割いるが、2017 年に比べて「とてもそう思う」小中学生は減っている。一方で、保護者の幸福感をみると、子どもよりも高い傾向がある。また、保護者は子どもほど学校段階による差がみられない。

Q あなたは、次のことについてどう思いますか。

図５－２－１　親子の幸福感

保護者回答　子ども回答

(%)



注　「自分は将来、幸せになれる」は保護者票では、「自分はこの先、幸せになれる」としている。

東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所 共同研究

「子どもの生活と学び」研究プロジェクト

調査企画・分析メンバー

プロジェクト代表者

佐藤 香（東京大学社会科学研究所 教授）

野澤 雄樹（ベネッセ教育総合研究所 所長）

プロジェクトメンバー

耳塚 寛明（お茶の水女子大学 名誉教授、青山学院大学 客員教授）
秋田 喜代美（学習院大学 教授、東京大学 名誉教授）
松下 佳代（京都大学 教授）
石田 浩（東京大学社会科学研究所 特別教授）
藤原 翔（東京大学社会科学研究所 准教授）
大野 志郎（東京大学社会科学研究所 特任准教授）
大﨑 裕子（立教大学 特任准教授）

木村 治生（ベネッセ教育総合研究所 主席研究員）
松本 留奈（ベネッセ教育総合研究所 主任研究員）
福本 優美子（ベネッセ教育総合研究所 研究員）
朝永 昌孝（ベネッセ教育総合研究所 研究員）
岡部 悟志（ベネッセ教育総合研究所 主任研究員）
中島 功滋（ベネッセ教育総合研究所 主任研究員）
大内 初枝（ベネッセ教育総合研究所 研究スタッフ）
渡邉 未央（ベネッセ教育総合研究所 研究スタッフ）

※調査票検討・調査基盤の持続性ワーキンググループメンバー
須藤 康介（明星大学 准教授）
小野田 亮介（山梨大学大学院 准教授）

※所属・肩書きは、2024年３月時点のものです。

研究プロジェクト Web サイトのご案内

東京大学社会科学研究所
https://web.iss.u-Tokyo.ac.jp/clal/

ベネッセ教育総合研究所
https://berd.benesse.jp/

「子どもの生活と学びに関する親子調査2023」ダイジェスト版

発　行　日：2024年３月27日
発　行　人：野澤 雄樹
編　集　人：木村 治生
発　行　所：㈱ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所
編 集 協 力：邵 勤風

0HNB03
©Benesse Educational Research and Development Institute
無断転載を禁じます。